
フェアリーテイル 転生者は滅竜魔導使？

クロム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリーテイル 転生者は滅竜魔導使？

【Nコード】

N4517T

【作者名】

クロム

【あらすじ】

日常ライフを過ごしていた俺、蘇我海斗そがかいとは

ある日、鉄骨に潰された。神の手違いということで、お詫びにフェアリーテイルの世界に転生させてもらえるようになった。

これはいろいろな魔法や魔導具を使いこなし、

冥の滅竜魔導使となった不真面目な主人公が、仲間と共に頑張る、物語です。

原作キャラが多少性格や口調が違いますが、それでもよい人のみお読みください。

物事には、必ずきつかけがある！（前書き）

これは、オリ主がチート能力を使いがんばる話です。

オリ主や、チートが嫌いな方は、「戻る」を

押すことをオススメします。

それでもよい方はお進みください

物事には、必ずきつかけがある！

俺の名前は、蘇我^{そがかい}海斗ごく普通の高校生だ。

運動では走ることは好きだが、

スポーツは得意というわけではない。

勉強ではまあ、めんどくさいがそこそこ頑張っている方だ。

そんなこんなで、日常ライフを過ごしている俺だった。

しかし俺は、この時まで気づけなかった。

これから俺の運命を、変えてしまう出来事にあうことに…

俺は学校が終わり、一人で下校した。

本当なら部活に行くべきなのだが、その日、何故か

足を痛めてしまい、先生に報告し、休みを貰ったのだ。

そして家までの道のりをとぼとぼと歩いて、工事中のマンションの近くを通りすぎるところだった。

時間だよ

「え？」

俺は誰かの声が聞こえた。けれど、周りに人はおらず、俺一人だった。

聞き間違えだと思い、再び歩こうとすると

「君、危ない！！」

上から大声が聞こえたので見上げると

「なっ！！？」

鉄骨が俺の周りに降り注ごうとしていた。

ヤバいと思い、ダッシュで逃げようとしたが、

「っ！！」

足が急に痛みだし、逃げられなかった。

そして次の瞬間、俺は…

鉄骨に潰された。

物事には、必ずきつかけがある！（後書き）

初めての投稿です。できれば感想と
アドバイスをお願いします！

どんなことも切り替えが大事！

気がつく俺は白いベッドで寝ていた。

「知らない天井だな…」

どこかの人造ロボットで戦う

中学生のセリフを言ってみる。

体を起こしてみると、白い部屋に俺はいた。

何もない、ただ真っ白な空間だ。

俺は、さっきあった出来事を思い返してみる。

俺はさつき、鉄骨を避けきれず死んでしまったはずだ。もしかしてここは夢か？そう思い、頬をつねってみる。痛い…ということはここは現実か？

でももしたら、俺は重体で大ケガをしているはずだ。けれど俺はケガ一つしていない。

今の現状に理解できず、困惑していると

起きましたか？

「っ！？」

あの時と同じ声が聞こえた。周りを見渡すが、やはりあの時と同じく、誰もいない。

「誰だ！？」

「あ、はい！い…今姿をみせるです！」

声の主は慌てながら、俺の返事に答えてくれた。すると、目の前が光だし、おれは目をつぶる。

目をあけると、そこには白い布で体を覆ったロングで、藍色の髪をした女の子がいた。

見た感じ、ひぐらしの羽入のような感じだが、ツノのような物がなく、そのかわり頭の上に輪っかのようなものがあつた。

「すみません、あなたがここにいるのは私が原因で…」

女の子が何か行っているが、俺は頭の輪っかが気になり、輪っかに触ろうとしてみる。

「あ…あの、聞いていますか？あと、な…何で近づいて来ますか！？」

その手はなんなのですか！？あ、ダメです、この輪は

天使の輪といって、気軽に触っちゃっ！あっ！！

だ…ダメです…そ…そんなに触ったら…アッー！！」

「ゴメン、悪かった…」

「しょ…初対面なのに、ひどいです…」

少しやり過ぎてしまったが、まあ、楽しかったし

とりあえずこの子に、今の状況を説明してもらおう。

「さっきの話だが、君のせいで俺がここにいると
どうということなんだ？」

「あ…はい、実は私、こう見えても人間界の監視する、

天使の一人なのです。人間を監視し、神の指示によって

寿命がきた人間を、死の世界に送ることが私達の仕事なのです。」

「……ふーん」

へえ…天使なんて本当にいたんだな…

人生って何があるかわかんないな…

あ、俺もう死んでるか。

「あ…あの、驚かないのですか？」

「いや、実際に天使がいたことには驚いてるけど、
いまいち実感がわかなくてな、

それで、話をまとめると君の間違いで

俺は寿命ではないのに死んでしまったと？」

「は…はい、そうなのです…本当にごめんなさいなのです！」

天使の女の子が慌てながら頭を下げる。

行動の一つ一つが可愛い。

「いや、そんなに謝らなくてもいいよ。」

「え…怒っていいのですか？」

「うーん、天使って言う存在が実在したっていうことが

わかって嬉しいし、君みたいな子に殺られたのだったら

別にいいし、あ…でも親に感謝の言葉を言いたかったな。」

「……変わった人なのです。」

「まあ、よく言われてたからね」

俺は中学の頃、走ることが好きなことと

速いことから、「メロス」と呼ばれていた。

……あんな服装で走りたくはないが…

まあ、とにかく俺が変わったやつということだな。

え、走ることにしか書いてないって？

まあ、気にすんな。

「で、俺がここに呼ばれた訳は？」

もしかして元の世界に戻してくれるのか？

「私もできたらそうしたいのですが、

あなたの肉体が粉々になってしまったので

戻すことはできなくなっていました…」

まあ、鉄骨に潰されたからな。

「そこで神は、あなたに別の世界で転生する

権利を与えるそうなのです。」

「別の世界？」

「はい。あなたが選んだ好きな世界に転生させて

あげるということなのです。」

「……それって架空の世界でもいいのか？」

「はい。あと、あなたが望む能力もあげるとい

うことなのです。」

それってチートすぎないか？

「良いのかそんなに？」

「もともとは私のせいですから、特別なのです。」
うーん、だったらその言葉に甘えよう。

「じゃあ、転生する世界は「フェアリーテイル」で、
力はいろんなアニメや漫画の魔法や魔導具、異能力が使えて
あと、俺を冥の滅竜魔導使にしてくれ。」

「……いくら何でも、チートすぎではありませんか？」
「必要なものは、できるだけ揃えておきたいからな。
できないか？」

「いえ、わかったのです。」

あ、あといい忘れてたことがありました。」

え、まだなにかもらえるの？

「私も一緒に行くのです。」

……… ああ、なるほど。

「自分がミスったから、責任もってついていけと？」

「はい。そうなのです。」

……… まあ、こんな子と行けるだったらいいか！

「そこで私に名前をください！」

「え、名前？」

「我々天使には名前がないのです。」

だからみんなから呼ばれる名前がほしいのです！」

……… うーん、名前ね。

つけるんだったら、羽生なのだが…それじゃーな…

「じゃあ君は、これからはスイカだ！」

「…スイカ…ですか？」

「ああ！」

スイカというのは親が俺がもし女だったら、
というときに用意してくれた名だ。

妹も生まれていないのでこの名は使われず、
保留されている。だったらこいつにあけてもいいだろう。

「どうだ？」

「はい！わかったのです！

今日から私はスイカなのです！」

女の子、スイカが嬉しそうに跳びはねる。

やっぱり可愛いな。

「では！新たな世界にゴーなのです！」

そして、光が俺たちを包みこんだ。

どんなことも切り替えが大事！（後書き）

クロムです。

：今回はだらだらと長くなってしまいましたね。

次は主人公達のプロフィールを書こうと思います。

アドバイスがある方、よろしくお願いします！

主人公 & a m p ; (元) 天使設定 (前書き)

この話は主人公と元天使についての解説です。

話につれてチヨクチヨク修正していくと

思います!では...

主人公 & a m p ; (元) 天使設定

そがかいと
蘇我海斗

16歳

普通の高校生だったが、スイカに間違っ
て殺され
転生させてもらう。

性格は変わっているが、仲間への思いやりが
強いことから、周りからの信頼が強かった
そう
だ。

つらいことをポジティブに考えるので
基本的に嫌いなことがない。
だが、面倒臭がりやである。

それと仲間やスイカに傷つけるやつはも嫌
い。
キレると、性格や口調ががらりと変わり、
暴力的になる。
キレたカイトを止められるのは、今のところ
マカロフとスイカだけである。

好きなのは、スイカと仲間、あと走るこ
とである。
スイカのことは妹兼恋人と思っている。
好きなタイプは、ドジっ子、ツンデレ

能力は魔法や魔導具、異能力使いこなし、
冥の滅竜魔法が使える。

「冥」とは無を表していて、技にあたると
当たった相手は消滅してしまう。
つまり、「物質や現象」を「無」にする力
である。
生命のないものを食べることができる

これは物だけでなく、魔法でも有効である。

但し、カイトが使えるのは魔力だけであり、
気や霊力等の技、武器は使えない。

だが、「聖騎手の首飾り」等、カイトが魔力によって
強化すれば使える。但し、効果が変わってしまう
ことがある。

髪はやや長めで、色は黒髪に青が混じった感じで、
身長はエルザと同じぐらい。

服は、袖の長い服の上に少し大きめの袖の短いものをきて、
BLACKCATのトレインの服装に似ている。

転生してからは驚くほど足が速くなった。

腕力よりも脚力のほうが強い。

カイトの場合、乗り物で移動するよりも

走ったほうが速い。光でも、カイトの半分の力に
追い付くことができず、本気ならば周りが止まって
いるような感覚になる。

簡単いえば、ジョジョのプッチ神父のスピードに
簡単についてこれるのである。だが、このせいで、
スイカが戦いをサボるようになったため、

愛銃、ハーデイスを使って、遠くからスイカを
援護することとなった。

あまかわすいか

天川水禍

年齢不明

カイトを間違って殺したどじな天使。

性格はひぐらしの羽生に似ているがオヤシロ様モードはない。
ドジだがどんなことでも一生懸命頑張る子。
怒るとカイト以上に怖い。

天界にいたころは落ちこぼれといわれ
周りと関わりを持つを嫌っていたが、
カイトに出会ったことで、少しずつ周りとの
関わりを持つと頑張っている。

好きなのは甘い物とカイトと友人、あと名前で呼ばれること。
天界では名前が要らないため、スイカは
誰かに呼ばれることを望んでいた。
そして名前をくれた、カイトに好意を抱いていく。
天界にいた頃、姉のように慕っていた
人物がいたらしい。

嫌いなことは、暴力、早口、辛いもの
名前で呼ばない人である

物の記憶や感情を読みとれる力を持ち、
水の滅竜魔法が使える。
人の傷を癒す魔法も使える。
天使としての力は失っているようだ。

髪はロングで董色。
服は水色のワンピースである。
身長はルーシイよりもやや低め。

主人公 & a m p ; (元) 天使設定 (後書き)

クロムです。

今回は主人公達のプロフィールでした。

後々つづくあえ要素がありますが、
楽しみにしてください。

次は主人公達の腕試しです。

その世界での自分達の設定！あれ？前回しなかったっけ？

目をあけると、俺達は森野の中にいた。

周りが明るいことからたぶんまだ

昼ぐらいだろうと、俺は思った。

周りにいるのは、俺とスイカだけである。

よくよく見ると、スイカと俺の服装が変わっていた。

俺は長い袖の服の上に袖の短い上着のようなものを

着ていて、ジーンズのようなズボンをはいている。

スイカはウェンディが着ているワンピースの色が、

少し青っぽくなったようなのを着ていた。

着たことのない服だったが、サイズもよく

動かしやすかった。

とりあえず、今の状況を整理しなければ…

「スイカ、今の時代がどの辺りかわかるか？」

「あ、はい。神様が書いたメモによると、今は

原作の1年前の時代らしいのです。」

と、いうことは、ルーシィとナツが会った1年前か。

うーん、ナツ達が子供の頃の時代もよかったのだが…

まあ、いいだろう。自分達の力がどんなものか、

試せる時間があるわけだし。

「あ、あと子この世界での私達の設定も書いてあるのです。」

「俺達の設定？」

「はい。私達がこの世界で、どのように過ごしてきたか、

このメモに書いてあるのです。」

なるほど、それで俺達がどうゆう経路でここに

いるのが、わかるということか。

俺はスイカの持っている、紙を見してみる。

カイト ソガ 16歳

冥の滅竜魔導使

小さい頃、冥の竜「ジユマゾール」に育てられていたが、ある日を境にいなくなり、とある施設に引き取られる。

施設に引き取られ、数年たったある日、盗賊に

施設が襲われる。それを防ぐために、俺はみんなから

隠していた冥の滅竜魔法や魔導具、異能力を使う。

そこで俺は、施設の同期だったスイカが、水の滅竜魔導使

であることを知り、共に自分達を育ててくれた

「ジユマゾール」と水の竜「リヴァイアス」を

探す決意をする。

なるほど、これが俺の設定か。

色々と頑張っているなー、と思っていると、

「カイト、あなた宛に神様からの手紙なのです！」

「神が…俺に？」

そう言つて、スイカから手紙を受けとる。

それにはこう書かれてあった。

カイト君、初めて神です！

うち達のせいで死なせちゃって、ゴメンね！

まあ、いろいろと能力あげたから、第2の人生楽しく頑張つて！

じゃあ、あなたの能力の説明をするよ！

あなたは、冥の滅竜魔導使。どんなものは使つて試して。

生命のないもの（石とか魔力とか）を食べることで、

自分の魔力に変えることができるよ！

他の魔法についてだけど、あなたが使いたいって
思う魔法をイメージして、その魔法の名前を言えば使えるよ！
これは異能力についても、そうだね。

でも、能力を使うことで自分の寿命が縮んだりするような、
マイナス効果は消しておいたから、安心して。

あと、魔導具についてだけど、作るの面倒だから、
あなたに錬金術を使えるようにしたから。

あなたが望んだ武器や道具を作ることができるよ！

でも、1日で作れる道具は数は決まっているから気をつけて！

あと、最後にあなたを殺した天使、スイカのこと

なんだけど、許してやって！あの子も悪気があって

間違えた訳じゃないのよ。あの子も色々頑張っ

ているのよ。あの子、天界で他の天使に色々と言われてた

つらい頃もあるの。だからできれば、あの子と

仲良くしてあげて！

p・s 足、すっごく速いよ！

神様より

.....神様良い奴じゃないか！！

色々と面倒で省いた説明もあったけど、俺に力くれたし、

スイカだってすっげー優しいじゃん、まるでお母さんだよ！

あ、やべ。母さん思いだして泣けてきた。

とりあえず、よい奴だ、神は！

でも最後のつてどういうことだ？

「か：カイト！？目から涙がでてますよ！？」

「ああ：これは神への感謝の涙だよ……」

「？……嬉しいのですか？」

「……まーな。」

「何かよくわかりませんが、よかったのです！」

神様、俺はスイ力を恨んではいません。

むしろ、感謝しています。

ですから神様、安心してください。

俺はスイ力共に、この世界で頑張ろうと思っています。

だから、天界から俺達を、見守っていてください。

俺はスイ力を、絶対に守ってみせますから………

その世界での自分達の設定！あれ？前回しなかったっけ？（後書き）

クロムです。

今回は主人公達の現状についてでした。

神様良い人だ………

でも、まだまだ原作への道のりは長い………

次は主人公達が力をみせます！！

自分達の力を確かめよう！けど、損害には注意して！

「そういえば、スイカも滅竜魔導使なんだよな？」

「はい。そうなのです。」

「じゃあ、俺みたいに特別な力ってあるのか？」

「はい…天使としての力は失っているみたいですが、近くににいる人や物の記憶や感情を読み取ったり、周りの生命がある物の探知ができるのです。」

なるほど、じゃあスイカの前では嘘をつけれないな。

「記憶や感情を読みとるってきついんじゃない？」

「いえ、これは常に、というわけではなく、必要な時、自由に使えるから大丈夫なのです。」

……心配してくれてありがとうなのです……」

「え？い、いや、別にいいって。」

俺、ちよっとお節介だし……」

……女の子からお礼言われるのってなんか恥ずかしいな……

「も、もうひとつの生命探知ってのは？」

「あ、はい。これは生命や魔力があるものを私から半径一キロならば感知できるのです。」

しかし細かく正確に感知できるのは、だいたい半径百メートルぐらいなのです。」

「ふーん。そうなのか……」

自分達の力について話ながら、俺達はぼちぼちと森の中を歩いていった。すると、

「っ！生命反応を多数感知したのです！」

「……人……なのか？」

「いえ、人間にしては速すぎるのです！」

たぶん……魔物……こっちにくるのです……！」

俺は遠くを見渡してみると、数匹のウルフの群れが

こちらに向かっていた。

「話ができるのか？」

「できますが、たぶん無理だと思うのです…」

あちらは臭いでここまで考えたことを考えると…

戦いになると思うのです…」

「そつか…ま、この世界の手荒い歓迎だと思えばいつか。」
力を試すにはちょうどいいしな。

ウルフの群れは前方で俺達を囲むようにして、
戦闘体制に入っていた。

「カイトは滅竜魔法の使い方はわかりますか？」

「なんとなく…だが。」

「私が手本をみせるのです！」

スイカ深呼吸し、腕を口の前に構えた。

「水竜の咆哮！！」

スイカの魔法により前方にいたウルフ達がふつとばされる
さすが滅竜魔法、一発でこの威力とは…

滅竜魔法の威力に驚いていると、うまく避けた

ウルフの二匹が俺に向かつて襲いかかってくる。

俺は、ナツがいつもどのようにして技をだしているか
思いだしながら、腕を大きく構える。

「冥竜の翼撃！！」

俺の腕に白い靄のようなものが纏い、それで

ウルフ達に攻撃する。

ウルフ達は勢いよくぶっ飛び、木に叩きつけられる。
すると、ウルフ達や周りの草がまるで何もなかった
かのように消えていく。

こんなもの、人に使ったらひとまりもないな。

自分の力の危険性を改めて理解した俺だった…

しかし、ウルフ達の動きが遅くみえたのは何故だ…

俺はふと思った疑問を抱きながら、敵を倒していった…

魔物はだいたい片付き、最後の一匹をスイカがトドメをさそうとした……………その時！

「あうっ！！」

スイカが木の幹につまづき、転んでしまう。

これをチャンスと思ったのか、ウルフは

スイカに襲いかかった。

マズイ！！

そう思った俺はダッシュでスイカを庇おうとした。

だがこの時俺は不思議な感覚を覚えた。

スイカやウルフの動きが止まっていた。

何でこんなこと起きているのか、考えようとしたが

まず、スイカを助けることに専念した。

自分の体が動くことを確認し、ウルフに近づき

蹴りをかます。

蹴りを食らったウルフは空中に止まっていたが、

しばらくすると動きだし、すごい勢いで飛んでいった。

「か、カイト！？いつの間にいたのですか！？」

スイカも動きだしたようだ。スイカにさっきの出来事を伝えると、

「スゴいです！時を止める力を使えるんですね！？」

しかし、俺は時を止める力なんて

使った覚えがないが……………そういえば！

俺は神様の手紙について思い出す。

P・S 足、すつごく速いよ！！

神様……………やり過ぎだよ……………

「スイカ、今のはたぶん俺の能力じゃない」

「？ どういうことですか？」

「さっき神様の手紙に、足がすごく速くなっていると書かれたんだがな…あまりに速すぎて周りが止まったように感じるだけだと思っんだ…」

「…………… 神様ってやっぱりスゴいですね！」

「…………… ああ、そうだな…」

こうして俺達の初の戦いは終わった……………

自分達の力を確かめよう！けど、損害には注意して！（後書き）

クロムです。

神様ばねえー！ー！ー！ー！

カイトにはとりあえず、手加減と言つものを
これからさせていこうと思います。

スイカも頑張つて書いていこうと思います。

次は、魔導具についての話を書こうと思います！

〇〇〇な錬金術師！そして原作に向けて

「うーん……………」

転生してから半年たった頃、俺達は様々な敵を倒し、
飯としてギルドに入り、S級魔導使になるなどして経験を積み、
世界を旅していたのだが……

「どうするか……………」

日も落ち、暗くなった大地の上で、焚き火で

あたりを明るくしながら、俺はあることに悩んでいた。

「？ カイト、どうしたのですか？」

「ん、スイカ。起きてたのか。」

俺はこの悩み事から眠れず、スイカを早めに

寝かせておいたのだが、まだ寝ていなかったようだ。

「さっきからブツブツと……なにをいつてるのですか？」

「ああ、ちよつとな……………そうだ。スイカ少し

質問してもいいか？」

「え？ あ、はいなのです。」

「…………俺達は旅をして、自分の力を理解し、
強くなったよな？」

「？ はい。そうだと思いますです。」

「そして、頑張ってS級魔導使になったな？」

「？ はい。」

「そして今、原作から約半年前になったよな？」

「あの…カイト、質問の意味がわからないのですが……」
スイカは頭を少し傾げる。

「まあ、待て。これで最後の質問だ……………最近戦って

思うんだが…………スイカ、最近戦うのサボってないか？」

「（ギクッ！）そ、そんなことは無いのですよ。」

図星をつかれ、スイカは少し慌て誤魔化そうとするが、

カイトにはもうバレバレである。

「誤魔化してもダメだ、だからこれからの俺の戦闘スタイルを変えようと思うんだ。」

「そ、それで…どんな…」

「明日までには考えておくから、お前はもう寝ろ。」

「は、…はいなのです…」

スイカはトボトボと歩き、寝袋にはいった。

俺は考えた。

俺が動くと敵を瞬殺してしまう。

それじゃ、スイカのためにならない…

ならば「俺」が動かないようにすればいい
だったら俺は――――

そして俺は、神様がくれた錬金術の力を使った…

次の日

「スイカ、おまえにプレゼントがある。」

「は、はい！ななっなんですか！」

昨日の件のことで気にしているのか、
スイカはかなりおどおどとしていた。

「そんなにびくびくすんなって。」

俺は別に怒ってないから。」

「え！？…でも…」

「いいからいいから。」

で、おまえに渡す物はこの3つだ！」

そして俺は昨日、錬金術で作った

道具をスイカにみせた。

ひとつは十字架の模様がはいった丸型の赤い首飾り。

次は月の模様がはいった銀色の指輪。

最後はどこでも売ってあるような少し大きめの水筒。

俺はこの3つの道具の説明をスイカにした。

「まず、このペンダントは「聖騎士の首飾り」ていってな、

これをつけていると、自分にかかる呪いや毒などの

状態変化を無効化してくれる物のだ！」

「…ということは、魔物の毒が効かないと
いうわけですね！凄いです！！」

「まーな。よし次だ！

この指輪は……実際につけたほうがはやいな。

スイカ、この指輪をつけてみる。」

「は、はいなのです！」

スイカは自分の左手の薬指に指輪をはめた。

「よし、つけたな……」

（スイカ、俺の声が聞こえるか？）

（！ は、はい。頭の中で声が響くのです！）

（これはおまえが持っている月の指輪と、

俺の太陽の指輪の力によるものだ。特殊な念波を発していてな、

これをつけている者は心で会話することができるんだ！）

（なるほど。一種のテレパシーというわけですね！）

（そういうことだ。じゃ、念波を解くぞ。）

念波の波動が消え二人は普通の会話に戻る。

「じゃあ最後だな…これは一見、というよりこれは
只の水筒なんだがな…秘密はこれのなかにある！」

そう言つて俺は、水筒を逆さに向け、水を捨てる。
そしてしばらく経つが、水の勢いは変わらない。

「……もしかして中に何かはいつているのですか？」
水の流れをじつとみていたスイカが

こちらを向きながら質問する。」

「お、気づいたか。この中には「アクアマリン」

という鉱石がはいっている。これは空気に触れると
水を発生させることができる、特殊なものなんだ。」

「けど、なぜこれらを私に？」

「……指輪と首飾りは俺も持つてるから

渡すつもりだっただが……この鉱石はおまえに
とつて諸刃の剣だからな……」

「……さっきも言つたとおり、この鉱石は空気に触れる

ことで、水を発生させる。今さっきは水筒にはいつてくる

空気しか、この鉱石は触れていないが、これが

もし、水筒の外に出たら？」

「……さっきとは比べ物にならないほどの水が
発生する、ということなのですな。」

「ああ、その間はたぶんスイカに勝てる奴はいないだろう。

だが、一度取り出した「アクアマリン」を再び

水筒に封じこめられるのは、たぶん俺だけだ。」

「……わかつたのです。これを僕に預けて欲しいのです。」

「！……いいのか？」

「カイトはこれを、本当に大事な時に使えと

いつているのですな。」

「……まさかスイカがここまで読んでいるとは……」

「……よくわかつたな。」

「……カイトはお節介さんだから、半年もいれば
だいたいわかつてくるのです。」

「……聞いてると、だんだん恥ずかしくなってくるな……」

「じゃあやるけど、大事にしるよ。」

「はいなのです！」

俺はスイカに道具を渡すと、スイカが嬉しそうにぴよんぴよん跳ねている。

こいつが喜んでる姿は久しぶりだな。

やっぱり可愛いな。スイカは！

そんなことを思っていた俺だったが、いい忘れていたことを思いだし、気をとりなおす。

「スイカ、これからは俺は戦闘ではなるべく動かないから。」

「えっ!？」

予想外のことを言われ、スイカはバランスを崩したおれた。

スイカのケガの治療をしながら、俺はさっきのことについて説明した。

簡単にいうと、俺が動いたらスイカのためにならないので、俺は遠距離で攻撃するということだ。

危ない場合、俺も動くが重力魔法「グラビレイ」を俺にかけてあるので俺の動きは遅くしている。

それでも、乗り物よりも速いけどな。

この事をスイカに納得してもらうまで時間がかかったが…

とにかく俺は接近戦から遠距離へ、スタイルを変えた。

遠距離では俺はBLACKCATのトレインが使う

愛銃「ハーデイス」をつかうことにした。

弾は錬金術でいろいろ工夫できるし、

俺にとってのハンデには十分だからな。

こうして俺達二人は半年後にむけて
再び特訓の旅にでた。

待ってるよ……フェアリーテイル!!

○○○な錬金術師！そして原作に向けて（後書き）

クロムです。

やっと前ぶりが終わりました……

では今回出た道具について説明します。

「聖騎士の首飾り」

原作 ハンターハンター

本来は呪いを無効化する能力にカイトの力で
状態異常を無効化する能力が付け加えた。

月の指輪と太陽の指輪

オリジナル

この指輪をつけている者同士は、念波が発生し
テレパシーができる。

アクアマリン

オリジナル

カイトがスイカのために作った道具

カイトが作った真空の水筒に入れておかないと
永久に水を発生させてしまう、恐ろしい鉱石。
普段は飲み口の近くについている。

なお、これを再び水筒に封じこめられるのは
カイトのみである。

グラビレイ

原作 金色のガッシュ

ブラゴの呪文、重力で相手を潰す魔法であるが、カイトは自分の動きに制限をつけるため自分に使った。それでもカイトは十分に速い。

ハーデイス

原作 BLACK CAT

トレインの愛銃。オリハルコンという特殊な金属でできている。弾は錬金術でいろいろな工夫をして作るらしいので弾切れの問題は無い。カイトが念のため、オリハルコン製の仕込みナイフがつけており、接近戦ではそれを使用する。

はい。説明は以上です。

今回もただらとした文になってしまいました。

キャラクターの行動が難しいです…

次回からは原作突入編です

原作突入！！ようこそフェアリーテイルへ！！（前書き）

今回からは行との間隔や、

キャラの性格が変わっています。

それを頭に入れてお読みください。

原作突入！！ようこそフェアリーテイルへ！！

ここは、マグノリア。平和でなかなか大きな町だ。

俺達がここに来たのは、観光なんかじゃない。そう、俺達が転生してから一年もの間

待ち続けていたギルド、フェアリーテイルに入るためである……………

……

「ようやく俺が来てから、一年になるのか……長いようで短かったな……」

改めて自己紹介しよう。

俺の名前はカイト ソガ。

こことは別の世界に住んでいたのだから、とある天使の手違いで死んでしまった。

そして、そのお詫びとして俺に神様はチート能力と、冥の滅竜魔導使としての力をくれて、

俺にこの世界、「フェアリーテイル」の世界で、とある天使と共に、第2の人生を過ごすチャンスを与えたんだ。

俺が転生したのは、今から一年前。詳しくは第一部から見てください。ま、そんなこんなで力を使いこなせるようになった俺達は、フェアリーテイルに入るため、

マグノリアに来たのである。あれから俺も随分変わったと思う。

今の俺はぶっちゃけて言えばBLACKCATのトレインの瞳の色が赤くなり、髪がやや長めで

黒に少し青が混じったような色に変わっただけである。

まあ、この服装は気に入っているがな。

好きなのは、仲間とスイカ、あと走ることかな。

嫌いなのは、仲間を傷つける奴と面倒なことだ。あとム力つく奴はフルボッコにするけど、

スイカの話では、口調が荒つぽくなるらしい。

俺はム力つく奴にどんな事をしたかは覚えていたのだが、どんな事を言っていたのかは

覚えていないんだ。

あと、スイカのことでも性格が変わるらしい。ま、俺はスイカを愛しているけどね！

「カイトー！何をしているのですかー！速く来るのですー！！」

「ん？ああ！わかつてるよー！！」

俺は、楽しくはしゃいでいる、青っぱいワンピースを着た女の子のあとを追いかけた。

この子の名前は スイカ アマカワ

俺を間違って殺してしまった元天使だ。その罰として、天使の力を失い、この世界で

俺と過ごすことになった。正直、俺はこの子のことを恨んではない。

逆に、この世界に転生させてもらっただけでなくこの子と一緒に過ごせることに感謝している。

この子の見た目や口調は、ひぐらしの羽入にそっくりであるが、コインを跳ね返したり、

幽霊になる能力等はない。その代わりこの子は俺と同じく、

水の滅竜魔導使なのである。

他にも自分の周りの物の記憶や感情を読み取ることができたり、生命や魔力を探知する力を持っている。俺にとってはこの子は、妹のような存在であり、

自称俺の恋人でもある。まあ、これが俺達についてだな。

え？3つ位前のプロフィールの意味が無いって？

気にしない、気にしない。

こうして俺達は、フェアリーテイルへ向かっていった。

「カイト、先にこちらに来て良かったにですか？」

スイカが俺のほうを向きながら、質問してくる。

「ああ。ハルジオンに行ったら、ナツ達に会えるけど、港が半壊するのを防ぐのは

面倒だから、先にフェアリーテイルに入るってわけだ！」

「……相変わらず、面倒な事は嫌いなんですねー」

そんなことを言いながら歩き、俺達はフェアリーテイルの前まできていた。

「ここかー！」

「あうあう、き、緊張するのです……」

そして俺達は扉に手をかけ、

「じゃあ……いくぞー！」

「は、はいです！」

扉を開けた……

中には、大勢の魔導使達が集まっていて、見渡すと、ロキやエルフマン、グレイなど

フェアリーテイルの重要キャラクター達がいた。俺達は中へ一歩一歩ずつ入っていく。

スイカは緊張のせいか、俺から離れようとしないう。本当に天使だったのか？と疑ってしまうが、可愛いから別にいいだろう。

「君達見ない顔ね。もしかして、新人さん？」

すると、前から女の人の声が聞こえた。

ミラ・ジエーンだ。やっぱり実際に見てみると綺麗な人だと思う。もちろん、かわいさではスイカのほうが上だと思う。

「あ、はい！わ、私達、フェアリーテイルに入りたくてきました！ふえ、フェアリーテイルに入れてください！」

スイカがかなり慌てながら答える。

「ふふっ、わかったわ。そんなに緊張しなくても大丈夫よ。」

「わ…わかったのです。」

それでもスイカの緊張はほぐれていないようだ。

「ギルドについての説明は大丈夫？」

スイカはまだ緊張してるから俺が答えるか…

「大丈夫です。実際に仮としてギルドには入っていたときもあるの
で。」

「そうなの、ならギルドマークを打つわね。」

俺は右肩に、スイカは左手の甲につけてもらう。

「自己紹介がまだだったわね。私は、ミラ・ジェーン。あなた達は
？」

「俺の名前はカイト ソガ。よろしく！」

「わ、私はスイカ アマカワというのです！こ、これからはよろし
くお願いするのです！」

「じゃあ二人とも、……ようこそ、フェアリーテイルへ！！」

こうして俺達は、フェアリーテイルの一員となったのであった…

原作突入！！ようこそフェアリーテイルへ！！（後書き）

クロムです。

今回からは行を空け、少し読みやすくしていこうと思っています。

反省は、せっかく書いたプロフィールの

意味が少し、無くなってしまったことですね。

次は気をつけようと思います。

今回はナツ達との顔あわせです。

感想やダメだしがあるかたは

書いてくれるとありがたいです。

俺達のギルドでの活動報告！

俺達が、フェアリーテイルに入ってから、

数日が経っていた。ここでの生活は、悪くない。

スイカも少し、慣れてきたらしく、今はレヴィと一緒に楽しそうに話している。

人と関わる事を嫌っていたスイカにとって、大きな一歩を踏み出せたんじゃないかと、

俺は思ってる。

俺は椅子に座って、ミルクを多めにいれたコーヒーを飲みながら、

これまでの事を

思い返した……

俺達がギルドに入る事が決まった後、ギルドのみんなに、俺達の力をみせた。

スイカが水を操り、様々な動物の姿に変えてみせたあと、俺がそれらの水を、

全て消してみせた。すると、みんなのから大きな歓声が響き渡った。

まあ、滅竜魔法は貴重なものだからな。ナツ以外の滅竜魔導使を見たことが、

あまり、無いだろうからな。

こうして俺達は、みんなに歓迎された。ここにナツやエルザもいたら、もつとすごい

ことになっていたと思うが、俺にはこのぐらいの騒ぎがちょうど良いと思った。

グレイとは性格が似ているため、すぐに仲が良くなった。

脱ぎ癖は勘弁してほしいが……

あと、俺が銃使いであることから、アルザックやビスカとも仲良くなった。

この二人、早くくつついてしまえばいいと思うのは俺だけだろうか？
スイカは確か、この時からレビイと仲良くなっていたな。
女の子同士だから、わかりあえる部分もあるのだろう。

けど、これをきっかけに、スイカが、ギルドのみんなとの関わりを
深めていってほしいと、俺はこの時思った。

そういえば、ロキがスイカにちよつかいだしてたな

それでム力ついて、ロキに蹴りをかましたっけ。

何度も何度も。気がついたら、ロキは壁にめり込んでいて、ぶつぶ
つと

ごめんなさい…ごめんなさい、と言っていたな。

周りを見ると、みんなの顔が青くなっていたり、赤くなったりしてた
な。

特にスイカが、顔を真っ赤にしていた。あとでマスターに聞いたの
だが、

俺がロキを蹴りながら、スイカへの熱い思いを大声で叫んでいたら
しい。

まあ、恥ずかしいが、それは俺がスイカに対するある意味での本心
であり、

今さらなので、俺に悔いはなかった。

この時の真っ赤になってたスイカ、可愛かったな…

そんなこんなで、歓迎会が終わり、俺達はすっかりとギルドに溶け
込めてしまった。

依頼も少しずつこなしていった。ついこの間、闇ギルドの討伐依頼
が来たのだが、

あの時は楽しかったな スイカが闇ギルドの本拠地を、連中ごと
水ぜめにして、グレイがそれらの水をギルドごと凍らせ、俺がそれ
を削って巨大な

彫刻を作ったんだっけな。あれは俺の自信作だったな！

どこからどうみても、スイカそっくりだ！

これを見て、恥ずかしがったのか彫刻を壊そうとしていたので、俺はそれを
食い止めようと、必死で防いだ。何とか壊されるのは免れ、俺達は
無事に

ギルドへ帰還することができた。

しかし、スイカが頬を膨らませ、こっちを見ようとしなかったり、
 그레이が

あの彫刻を見て、若干ひいていた。訳は今でもわからないが…

まあ、俺達はこんな調子で生活している。こんな風な日々が続いて
いくように、

と願いながら、俺は再びコーヒーを飲む。すると……………

「ただいまー！ー！！！」

サラマンダーの一声によって、そんな願いは当分叶わないだろうな、
と思う俺なのであった。

俺達のギルドでの活動報告！（後書き）

クロムです。

カイト、はっちゃけすぎ……

愛の力は人を狂わすというのは、こいつにピッタリな言葉ですね。

実は、カイトだけでなく、スイカも隠された本性があります！

それは後々書こうと思います。

今回の最後やっとナツができましたね。

少しオリジナルエピソードを

この辺りにいれたいと思っています。

次回はエルザ登場まで書こうと思いますので、それでは、失礼します！

フェアリーテイルの魔導使として！（前書き）

この小説は作者の都合で、色々と文がメチャクチャです。ご了承ください。

あと、今回からはカイトとスイカが持っている太陽の指輪と月の指輪の能力が常に使われている、という設定になりました。では、本編です。

フェアリーテイルの魔導使として！

俺は飲みかけのコーヒーが入ったコップを持ちながら、乱闘が起こつてている場所から、スイカと共に避難していた。

ナツが帰ってくると、ギルドの一人に、「サラマンダーの情報嘘じやねーかー!!」

と言つて蹴つ飛ばし、その被害が周りに広がり、それが原因で、今、乱闘が繰り広げられている。

これが毎度のように起こつていると考えると、よくこのギルドは壊れないよな

(あうあう…か、カイト！あれを止めなくていいんですか!?)

(ああ、いつものことだからな。ほつといたらいいだろつ。)

(で、でも…)

「あつあの、いいですか？」

スイカと話していると、ルーシイが俺達に話しかけてきた。

「ん？見ない顔だな。もしかして、新人か？」

一応、初めて会った的な反応を試してみる。実際は知ってるからな。

「はっはい、ルーシイといいます。ここに入りたくて来ました！えつと…あなた達は？」

「そんなに堅苦しく喋らなくてもいいぞ。俺はカイト、カイって読んでくれ。」

「わ、私は、スイカといいますです。よろしく願いますのです。」

そんな自己紹介をしていると、ミラがこちらへやってくる。

「カイ、誰なのその子？もしかして新人さん？」

「ミラ・ジェーン！？すごい、本物だ　!!」

ミラの姿を見ると、ルーシイはとても興奮していた。ミラはフェアリーテイルの看板娘だからな、

有名なんだろうけど、ルーシイ興奮し過ぎだ。

「ああ、ルーシイっていうらしいんだが、ここに入りたいて。」
「そうなの？嬉しいわ、ここのことあなた達を含めて3人も新人さんが来るなんて。」

ミラ、笑うのはいいんだが、乱闘の被害を受けて頭から血が出るぞ！

しかも、少し不気味だし。

「3人？ということとは…カイ達も最近入ったばかりなの？」

「ハイなのです。私達は、とある事情で旅をしていたのですが、このギルドの噂を

聞いて、入ってみたいと思いましたのですそして、このギルドに入ってみたのですよ！」

「そうなんだ…じゃあ二人とも！これからよろしくね！」

「こちらこそなのです。」

「ああ、よろしくな。」

ドン…！すごい音が、なり乱闘が起こっている方を向くと、カナ、グレイ、ロキ、エルフマン、

そしてナツが魔法を使おうとしていた。

「魔法！？」

「これは少し危ないわね…」

少しどころの問題じゃないぞ、これは！

（カイト！これはまずいのでは！？）

（…ああ、面倒くさいけど、これ以上被害をだすわけには、いかないからな…）

俺はコーヒーを全部飲みほし、近くのテーブルにコップを置く。

「ミラ、ルーシイ、スイカ、悪いが少しの間、耳を塞いでてくれ。」

「？わかったわ。」

3人が耳を塞いだのを確認すると、俺は腰にしまっているハーデースを取りだし、

ポケットから特殊弾「騒音弾」ノイズバレットをハーデイスにセットする。

そして俺は、天井に向けて銃を撃ちはなった。

天井に弾が当たると、そこからキンと嫌な音が響き渡った。

「つぐ!」「なんだ、これ!」「頭が…イテエ!」

乱闘をしてみたみんなが次々と頭を抑え、蹲っていく。

「うつ、何なの…これ…」

「あの弾には特殊な魔法をかけていて「騒音弾」ノイズバレットっていうのです。

ルーシイ、無理はだめですよ。これは、耳塞いでも効果が少しあるのですから。」

「うん、…大丈夫よ。」

そして耳障りな音が消え失せた。ルーシイやみんなも大丈夫そうである。

するとマスターがこちらにやって来た。

「カイト、もつと違う方法で止めてくれんか?この音は年寄りには、ちとキツイぞ。」

「すみません、マスター。でも手っ取り早く止めるには、これが一番だと思っただんで。」

「まあよい。そこにいる者は新人か?」

「はっはい。」

「よろしくネ」

そう言くとマスターは、掛け声と共に二階へ二回転ジャンプをする。しかし、うまく着地出来ず手すりに頭をぶつける。

けれど、マスターは何もなかったかのように、手すりに登った。

手には書類の様なものが握られている。

「まーたやってくれたのお前ら…見よ!この

評議会から送られた文書の量を!」

やっぱり、評議会からだったか…

「まず、グレイ!密輸組織を壊滅したのはいいが、

そのまま素っ裸で町をぶらつき、挙げ句の果てに下着を盗んで逃走！」

「いやだって、裸じゃまずいだろ……」
その前に裸になるなよ。

「カナ！経費と偽って、某酒場で飲むこと大タル
15個！しかも、請求先が評議会！」

「……バレたか」
いや、普通にバレるだろ。しかもただ飲んだよ。

「ロキ！評議員レイジ老師の孫娘に手を出し、某タレント事務所から、損害賠償が来ている！」

ロキお前、星霊としての自覚あるのか？

「カイト！スイカ！お前らにもじゃ！」

え？俺ら？

「先日の闇ギルドの討伐の件で、成功したのはよい、だが闇ギルド周辺の森が凍結し、

それに加え、お前らが作った建造物が倒壊し町に被害がでたことで町から評議会に苦情がでている！」

「す、すみませんです……」

「……」

ええ、せつかくのおれが作った最高傑作が……俺がっかりしているのとは引き換えに、

スイカは少し、嬉しそうに見える。…なぜだ？

「そして……ナツ。」

マスターがガックリと項垂れる。

「盗賊一家を壊滅するも、民家7軒を壊滅！チューリー村の歴史ある時計台を倒壊！」

フリージア教会全焼！ハビナス城一部壊滅！ナズナ渓谷観測所崩壊により機能停止！」

ナツ……一体どうしたらそんなに被害を出せるんだ？

「アルザック！レヴィ！クロフ！リーダス！ウォーレン！ビスカ！」

それに他の奴らも！

…わしは評議員に怒られてばかりじゃ！！」

マスターはふるふると震え、そして言いはなった。

「評議員なぞクソくらえじゃ！！」

マスターは手に持っていた書類を燃やし、それをナツに渡すと、ナツはそれを食べた。

「よいか！理を超える力は理の中より生まれる。魔法は生き物なんかではない。

我々の内にある気の流れと自然界に流れる気の波長が合わさり、始めて、具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。

いや、己が魂全てを注ぎこむことが、魔法なのじゃ！

上から覗いている目ん玉気にしてたら、魔導は進めん！…評議員のバカ共を恐れるな！

自分の信じた道を進めい！それが、フェアリーテイルの魔導使じゃあ！！」

「おおおーーーー！！！！！！」

マスターの言葉に、みんなが歓声の声をあげる。やっぱりここはそうじゃなくちな。

（カイト、…私、ここに来てやっぱり良かったと思うのです。）

（ああ…俺もだよ。）

俺達は、やっぱりここに来て正解だったと、改めておもったのであった……

フェアリーテイルの魔導使として！（後書き）

クロムです。

久しぶりの更新ですね。

では、解説です。

ノイズバレット
「騒音弾」

オリジナル

カイトが作った弾。何かに当たると弾け、人が不快になる怪音波が発生する。

その音を直接聞くと、しばらく動けなくなる。

耳を塞いでも、多少効果がある。

みんなを黙らせる時によく使っている。

次こそエルザを登場させます！

エルザ来襲！？

ルーシーがギルドに入ってから、数日経った。

俺達はまだ、ナツとはまだ挨拶をしていなかったなので、軽い挨拶をした。

俺達が滅竜魔導使と聞いて、イグニールのことをきいてきたが、旅をしていた間、竜についての情報は1つも無かったと伝えると、ナツはガツクリと肩を落としていたが、自分以外の滅竜魔導使が仲間になった嬉しい等と言っていつもの調子を取り戻していた。

そうだ、マカオやエルバー公爵の本についての件だが、俺達はナツと一緒に行かなかった。

理由は簡単、ナツと戦うのが面倒だからだ。

簡単に説明すると…

ハコベ山に行く↓バルカンと戦闘↓力を見せる

↓ナツ「勝負しろ　！！」

エルバー公爵の本の依頼に行く↓また戦闘になる

↓力を出す↓ナツ「勝負しろ　！！」

となる。はつきりいって、面倒だ。俺がやだと言っても、

ナツは毎日のように勝負をふっかけてくるだろう…たぶん。

スイカにはその事を話しておいたのだが、

ルーシーと一緒に仕事が出来ないことに不満を言っていた。

ルーシーも本に興味があるという話をしたらしく、スイカとルーシ

イとレヴィの3人は、

とても仲良くなったらしい。

これは俺としても嬉しいことなのだが、ナツとの勝負を避けるために必死で説得し、

なんとかスイカはわかっててくれた。

なのでナツには俺たちの力を見せていない。この状態が続けば良いのだが…

そして現在、俺は椅子に座り、いつものようにミルクを多めに入れたコーヒーを飲んでいた。

みんなは、エルバー公爵の本の依頼についての話をしていた。

「でね、カニの中の実はエビの実だったんだよ」

「ハッピー、言ってる意味がわからないのです。」

まあ、普通はそうだな。

「ハッピー、あんたキャンサーのことまだ驚いてるの？」

「ルーシイ、キャンサーというのは何なのですか？」

「キャンサーは私が持つてる、星霊の1体なの。」

「それでね、そのキャンサーの語尾は蟹だから、「カニ」っていうかと思ったら、

「エビ」っていったんだ　まるでストレートだと思ったらフックをもらった驚きだよ！」

「へえ　星霊にも色々な個性があるのですね」

口キミたいな奴とかいるからな、というか星霊って普段、何をしてるんだろうな？

「あれ、マスターがいないわね。」

「そういえば、そうなのです。」

そういつて周りを見渡していると、ミラが説明してくれた。

「マスターなら、定例会に行ってるわよ。」

「定例会？」

「それって何なのですか？」

「地方からギルドマスター達が集まって、定期報告することよ。評議会とは違うけど…ちょっとわかりづらいかな？」

そしてミラは、リーダスから光筆を借りて、空中に図を書き、魔法界の組織について説明してくれた。

「へえ ギルド同士のつながりがあるなんて、知らなかった。」

「私もなのです。」

「ギルド同士の連携は、大切なのよ。これをお粗末にしていると…」

「黒い奴らが来るぞおおお」

「ヒイイイ！」

「あううう！」

ルーシビビリすぎだろ。後、スイカ可愛い。

「ひやはは、二人ともビビリすぎだろ」

「おっ驚かさないでよナツ！」

「そ、そうなのです！」

まあ、ある意味黒い奴らっているんだが、一応補足するか。

「でも、ルーシイ。黒い奴らつてのは、本当にいるんだぞ。」

「え、そうなの？」

「うん、黒い奴らつていうのは、連盟に属さないギルド、つまり闇ギルドのことよ。」

「闇ギルドか…なんか怖いわね。」

「そうなのです…」

おいスイカ お前はこの前、俺と一緒に闇ギルド潰したばかりだろ。

そんなことを話していると、いつの間にかナツとグレイが喧嘩していた。

どうしてこう毎日と喧嘩できるんだ？ 喧嘩するほど仲がいいっていうけど…

「大変だあああ!!」

扉がバンッと開き、見てみるとそこには慌てた様子のロキが立っていた。

「エルザが…帰って来た!!」

「……………!?」「……………」

それを聞くとギルドのみんなが冷や汗を流していた。

「あの…エルザって?」

「ああ、エルザっていうのは…」

「「妖精女王」(ティターニア)のエルザだろ」

俺がルーシィ達の会話に割り込む。ミラは、

少し驚いた表情で俺を見た。

「エルザ・スカーレット、通称「妖精女王」のエルザ。換装の魔法を使い、

様々な鎧や武器を使って戦う、フェアリーテイルのS級魔導使、だよな?」

「ええ…そうだけど。カイ、エルザのこと知ってたの?」

「ああ、旅をしていて、そんな情報を耳にしたことがあつてな。」

「へえ、じゃあそのエルザって人、凄く強いんだ。」

「そうよ。このギルドの女魔導使としては、たぶん一番強いと思うわ。」

おい、あんたもいるだろうが。

そして扉の前に、巨大な角を持ち、鎧を纏った女性がいた……

エルザ来襲！？（後書き）

クロムです。

ようやくエルザを登場させました。

主人公、あんまり会話、してないです。
会話は大体スイカがしますので……

では次回、ララバイ編へ突入です！

出発！そしてフラグのような過去話

カイトサイド

俺は今、マグノリア駅にいる。

ナツとグレイはいつものように喧嘩し、ルーシィとスイカは、仲良さそうに話している。

そっだよな…ルーシィと一緒に仕事すんの…初めてだもんな…

「はあ……」

俺は肩を落とし、ため息をついた。

なんで俺がナツ達と一緒にいるのか？それは、先日に遡る。

エルザが帰ってきて、手に持っていた角を床に置くと、みんなに注意をしていた。

その姿を見て、俺は…

高校の頃の記憶を思い出した。

俺のクラスに凄くうざい風紀委員がいた。学校の成績も良く、運動にも長け、見た目も良く、

みんなには、完璧超人だと、みんなに言われていた。

でも、なんでそいつがうざいかだって？それは、俺の面倒臭がる性格を、嫌っていたからだ。

その生で、俺はアイツにいつも注意されていた。まあ、俺は聞いていなかったのだが。

だが、そうしてそいつの近くにいると、そいつのあることに気がついた。

昼休み、俺は同じ陸上部だが、足を痛めて部活を休んでいる、親友

と一緒に弁当を食べるのだが、俺は、なんとなくそいつの席を見ると、アイツは1人座って弁当を食べていたのだ。

後で聞いたのだが、そいつは、完璧超人と言われるのと、風紀委員の仕事を頑張り過ぎる

せいで、クラスから孤立していたらしい。

そんな姿を見た後俺は席を立ち、そいつに近づき、

「一緒に食べないか？」

そんな言葉を口にしていて。そんなことを口にした自分にも驚いたのだが、

なぜだが俺はなんとなくで、そんなことを言っていたのだ。そいつはそれを聞いて、

一瞬驚いた顔をするが、

「なんで私が、いつも面倒臭がるあなたと！」

と言つて、やっぱ無理か…と思つていると、

「まあ良いわ、あなたには言っておきたいことが山程あるしね。

私は今日1人で食べるつもりだったから、丁度良いわ。

べつ別に寂しかった訳じゃないんだからね！」

どこのツンデレだよ。

そんな訳で俺達3人は一緒にいるようになった。

そいつは相変わらず俺の注意ばかりするが、よく笑うようになっていた。

俺もそいつといて楽しかった。そいつの性格は

ツンデレなので、そいつの表情を見ているのが楽しかった。

親友も、俺らといて、楽しいと言っていた。

俺らみたいな奴らと一緒にいるのだから、変わった奴だよな。

おっと、過去話に時間をかけてしまった。

まあ約すると、エルザの姿み見てそいつについて思い出したということだ。

あいつら今頃どうしてるかな……

あれ？なにこれ、なにかの前触れ？ま、いつか。

よし、話を戻そう。

そしてエルザは、ナツと 그레이 に頼みを言ったのである。

俺は関わらずにしようと、コーヒーを飲んでいると、

「そこにいる者達、少しいいか？」

え？俺達のことを言ってるの？

「えっと、それって俺達のことか？」

「ああ、君達3人にも頼みがある。」

するとエルザは、俺の腰にあるハーデイスを見ていた。

そしてすぐに顔を上げ、言い放った。

「君達にも来てほしいんだ。」

そして現在にいたる。ほんとには行きたくなかった。だがスイカが

「ルーシイも行くなら私も行きたい！」

といって言うことを聞かないので、俺も仕方なくついて行くことに決めたのだ。

あゝあ、面倒だ。

「すまない、待たせたな。」

ようやくエルザが来たらしい。見ると背中に大量の荷物を抱えていた。

「荷物多っ！」

「お、重そうなのです。」

ルーシイとスイカは一緒に驚いている。

「今日も仲良いつてみよう！」

「あいさ！」

二人はぎこちなく肩を組んでいた。

「ああ、仲の良いことは良いことだ。

3人ともすまないな、急なことを言ってしまったて。」

「かつ構いません、私、ルーシイと言います！今日はよろしく願います！」

「わ、私はスイカと言うのです。よろしく願いますのです！」

二人とも緊張しすぎだつて。あ、俺も自己紹介しないと

「俺はカイト、カイトって呼んでくれ」

「うむ、そんなに緊張しなくてもいいぞ二人とも、私はエルザ、今日はよろしく頼む。」

ルーシイ、君のことは聞いている。傭兵ゴリラを指一本で倒したとか……」

「ええ！？」

「え、エルザさん、それは多分星霊魔法を使って倒した、ということの間違いだと思うのですが……」

「そうなのか？すまない、間違えてしまつて。」

「いいえ！誤解がとけたのなら良いです。」

二人とも、だから緊張し過ぎだつて。

あ、そうだ。

「……エルザ、少し聞いていいか？」

「なんだ？」

「なんで俺達新人3人を呼んだんだ？」

「呼ぶんだつたら、別の奴でもよかったんじゃない……」

「ああ、それは……」

「エルザ！付き合つてもいいが、条件がある！」

説明をしようとしていたエルザに、ナツが割り込む。

「お、おい！？」

「なんだ？」

「帰ったら、俺と勝負しろ！」

「「ええええ！？」」

「おいおいナツ、話しの邪魔すんなよ。」

「お、お前…死ぬ気か！？」

「昔は勝てなかった、けど俺は強くなった！今度こそ、エルザに勝つてみせる！」

「…なるほど、確かに成長したな、ナツ…私も些か自信はないが…いいだろう、

その条件受けてたとう！ 그레이、カイ、お前らもついでにやるか？」
ちよ、そこで俺達にふりますが、エルザさん。

「い、いや…遠慮しとく。まだエルザに勝てる気がしないからな…」

「俺は…エルザの実力を見てから決めようと思う。」

「わかった、では行くぞ！」

「よっしゃあ！燃えてきたああ！！」

ナツはエルザとの戦いに向けて燃えていた。
全身を燃やして。

こうして俺達は列車に乗り出発したのだった。

出発！そしてフラグのような過去話（後書き）

クロムです。

過去話が長過ぎる…一応フラグとして立ててみたのですが、設定をしていなかったなので時間がかかりました。

出来ればコンパクトにできる方法を、教えてくれたら嬉しいです。

では次回、出来れば鉄の森襲撃編まで書こうと思っ
ています。それでは。

改めての自己紹介！忘れ物の確認は忘れずに…

「う…うつ…うつぶ…」

「おいおい、さっきのやる気はどこいったんだよ。」

「ナツ、大丈夫なのですか？」

今、俺達は列車に乗っている。

片方の席に奥から、グレイ、俺、ナツの順に、

もう片方の席はルーシイ、スイカ、エルザの順に座っている。

ナツは列車に乗り初めると、すぐに酔ってしまい、すでにグロツキ
ー状態だった。

「ナツ、私の隣に來い。スイカ、悪いが変わってやってくれないか
？」

「は、はいなのです。」

エルザと呼ばれ、ナツはエルザとルーシイの間に、スイカは俺の隣
に移動した。
すると…

ドンっ！！

「ぐふっ！！！」

「くくくく！！！！」「くくくく」

エルザはナツの腹を殴り、氣絶させ、頭を膝の上にのせた。言っ
れば、膝枕状態である。

皆、その光景を見て啞然としていた。

「そっそっといえばエルザさんの魔法って換装の魔法を使うのよね、
具体的にはどんな魔法なの？」

「私の換装は「騎手」（ザ・ナイト）といってな、
武器だけでなく鎧も変えながら戦うことができる。」

「エルザの魔法はキレイだよ、血がいつぱい出るんだ！…相手の！」

「へ、へえ…：そうなんだ…」

「エルザさん、凄いのです…」

ルーシィ、顔がひきつってるし、スイカ、目が笑えてないぞ。

「二人とも、私を呼ぶ時はエルザで良い。でも、私はグレイの魔法の方が、綺麗だと思うぞ？」

「そうか？」

そしてグレイは手に、氷でできたフェアリーテイルのシンボルマークを作った。

「確かにね…：そういえば、カイとスイカは？カイの魔法はこの前見たけど…」

「あれ？スイカ、ルーシィに俺達のこと伝えてなかったっけ？」

「いえ、ナツには話しましたが、ルーシィには話してないのです。」

「ああ、そうだったな。俺達は、二人とも滅竜魔導使なんだ。」

「ええ！？二人とも、ナツと同じなの！？」

「そうだったのか…」

エルザとルーシィがそのことを聞いて驚く。

「はいなのです。私は水の滅竜魔導使、カイは、冥の滅竜魔導使なのですよ。」

「カイ、冥というのは？」

「うゝん。」

あれってどう説明すればいいんだ？

無にするつつたつて見せなきゃわからないだろうし…：そうだ！

「二人とも、少し待ってくれ。」

俺はただの剣を頭に描き、錬成させた。

「何も無いところから剣が出てきた！」

「魔法剣か？」

「いや、俺はイメージした物を、作ることができるんだ。」

「じゃあ、お前がいつも使っている銃弾は…」

「ああ、いつもこれで作ってるよ。」

でもこれって魔力があるものしか作れないんだよな。一度、斬魄刀

を作ろうとしたけど、

威力がとても弱い物しかできなかった。

たぶん、錬金術ができるのは魔力があるものだけだと、俺は思ったけど。

そして、俺は剣に触れ、消した。

「あれ？消えちゃった。」

「俺の力は、物を消滅させること。けど、あまりに危険だから、俺は銃で戦うことにしてる。」

「そうだったんだ……」

「なるほど、それが「深淵の消滅者」（アビスクリアー）と「無限の湖」（インフィニティレイク）と呼ばれる理由だったのか。」

……………え、何それ？

「エルザ、今さっきの呼び方って何？」

「お前達の名だ。知らないのか？最近噂になっていたぞ？」

その二人に狙われたら、命が終わると……」

「……いや。旅をしている時には、聞かなかった。」

「私もなのです。」

「エルザ、だから今回の件に、二人を誘ったのか？」

あつ！列車乗ってからすっかり忘れてた。グレイナイス！

話が長いので省略すると、鉄の森 アイゼンヴァルド

という闇ギルドが、ララバイにかけられた封印を解いたということらしい。

俺は知っているのだが、あえて知らない振りをして、誤魔化したけど。

それを調べるために、俺達の力を借りたいとのことだった。

俺達は列車を降り、その後について話した。

「この町に、鉄の森がいるの？」

「ああ、そうらしい。」

「久々に腕がなるな！」

「速く、ララバイについて調べないとです。」

「……さて、そろそろ言ってやるか。」

「なあ、エルザ。」

「ん？どうしたんだ、カイ？」

「……………ナツは？」

「「「「「あつ！」「」「」「」」

改めての自己紹介！忘れ物の確認は忘れずに…（後書き）

クロムです。

主人公の錬金術に付け加えをしました。

主人公は、魔力の物しか作れません。

だから、斬魄刀は作れません。但し、魔法改造すれば使える物もあります。

次回、妖精の尻尾VS鉄の森です。

非常事態には慌てずに！

スイカサイド

エルザが、ナツを列車に置いてきたことに責任を感じて大変な事になったのです！

エルザが駅員の人に、列車を止めるように頼み、ハッピーが無理やりレバーを引いて、

列車を止めてしまったのです。あうあう…

やっぱり、フェアリーテイルの人は変わってるのです。

しかも、その後見知らぬ人に自分の荷物を預けようとしていたのです。

見知らぬ人、かわいそうなのです。

「エルザ、少し落ち着け。」

「大丈夫だ、私は落ち着いている。」

「いやいや、どうみても落ち着いてないだろ。…しよーがない、俺がナツを連れてくる。」

お前達は魔導四輪を借りてきてくれ。」

「連れてくるって…どうやって？」

「列車の所まで走ってくる。」

「ええ！？ここから列車までかなり離れちゃったわよ！」

「大丈夫大丈夫、だから魔導四輪を頼む」

「あ…ああ、わかった。」

カイトがエルザに了承をもらうと、列車の方角に向かってクラウチングスタートの構えをとった。

「スイカ、合図を頼む。」

「は、はいなのです。」

そして私は、手を上に挙げた。

「位置について、よい…スタート！」

手を振り下ろすと、カイトをものすごいスピードで移動したのです。
「凄っ！もうあんな所まで行ってる！」

「な、なんだあれは！？」

「俺が聞いた話では、あれはただ走っているだけで魔法は使っていないぞ。」

「魔法を使つてなくてあのスピードなの！？」

「そうなのか、スイカ？」

エルザとルーシィが驚いた表情で聞いてきました。

確かにあれは誰が見てもビックリするのです。

「はい、カイトは走ることが好きらしいのですが、夢中で走っているうちにあんなに速くなって

しまったらしいのです。」

嘘なのです。実際はカイトが神様からもらった力なのです。

「俺も最初にそれ聞いてビックリしたからな。」

たぶん、カイには乗り物はいらないと思うぜ」

「そ、そうね……」

「じゃあ、カイ達が戻るまで、私達は魔導四輪を探すぞ。」

カイトサイド

うわー、やっぱり風って良いわ！

すっげー気持ちいいもん。

そんなことを思っていると、ナツが乗っている列車が見えてきた。

ナツは列車の上で、手に変な笛を持った男と戦っていた。

「ナツ、大丈夫か！？」

「おう、カイか。お前らよくもさつきは俺を置いていきやがったな
！」

「すまん、悪かった。」

ああ、やっぱり根に持ってたか。

「ちつ、妖精^{ハエ}の仲間か。仕方ない、覚えていやがれ妖精共！」
なんか雑魚敵っぽいセリフをはきながら、男は去っていった。

「ナツ、いったん駅に戻るぞ。エルザ達が待つてる。」

「わかったけど、どうやって戻るんだ？」

「…任せろ。」

俺は手にチューリップクリスタルを作り、駅をイメージした。

「ジャンプ」

そして、俺とナツは駅へボソソジャンプした。

「みんな、戻ったぞ。」

「うおっ！カイ、いつの間に！？」

「お帰りなのです。」

スイカを除くみんなは、俺達が急に来たことにビックリしていた。

「カイ、今さっきのはなんだ！？体が光ったと思ったら、いつの間にかここに來てたぞ！？」

「ああ、今の簡単にいうと瞬間移動みたいなもんだな。」

「へえ、カイってそんなこともできるんだ。」

「全く、無茶苦茶だな。」

ルーシイ、エルザそんなに呆れるなよ…さて、本題に入るか。

「ナツ、今さっきの男はなんだ？」

「俺に急に喧嘩ふっ掛けてきたんだよ！確かに、鉄の森っていったっけな？」

「鉄の森に会ったのか、ナツ！？」

「くそつ、さっきナツに話を聞かせてやるべきだったな。」

俺はエルザがナツを殴らないように注意しておく。エルザ、そうだったみたいなのをやるなよ…

「そういえば、さっきの奴変な笛を持ってたな。三つ目の骸骨の形のやつ。」

よし、ここは思い出した振りをしよう。

「…三つ目の骸骨…ララバイ…マズイかもな。」

「知っているのか、カイ!?」

「俺の予想が正しければ、あれは集団呪殺魔法、ララバイかもしれない。」

「何!?!」

「集団呪殺魔法!?!」

「思い出した!魔法の中には、禁術の魔法があるんだけど、その中に呪歌っていうのがあるのよ。」

でもララバイの恐ろしい所は、その音を聞いただけで死んでしま
うの!」

「聞いただけでなのですか!?!」

「ああ、…そしてついた名が、集団呪殺魔法ララバイだ。」

非常事態には慌てずに！（後書き）

クロムです。

予定道理に進まない（悲）
では、説明です。

チューリップクリスタル

原作 ナデシコ

ボソソジャンプするために必要な鉱物。
A級ジャンパーしか使えないが、カイトは
自分のナノマシンを変えて、ジャンプ
できるようにしている。

では次回、対決鉄の森

いきなり戦闘！？雑魚に構ってる時間は無い！

オシバナ駅

スイカサイド

二ドトルバレット
「針弾！！」

「「「ぐわあああ！！」」」

「は、針がああ！！」

グラヒティバレット
「重力弾！！」

「「「ぎやあああ！！」」」

「つ、潰されるうう！！」

インバクトバレット
「衝撃弾！！！！」

「「「がはっ！！！！」」」

「な、なんだ、コイツの弾は！？ただの鉛弾じゃないぞ！！」

サークルソード
「循環の剣！！」

「「「ぐおおおお！！」」」

「こ、この女強いぞ！！」

「くそ、たった二人の妖精ハエごときに俺達が苦戦するとは！」

「ならば、後ろの女二人を……」

「「「ぎやああ、俺達の髪がああ！！」」」

「「「な、流されるうう！！」」」

「だ、ダメだ！近づいたら、あの蟹みたいな奴に髪を切られちまうし、

津波を起こされてぶっ飛んじまう！！」

「い、いったい何なんだ、コイツらは！？化け物か！？」

「てめえら……無事にすむなんて思うなよ！！炸裂弾バーストバレット！！！！」

「「「「ぎやあああ！！！！」」」」

……あ、はいスイカなのです。

今私達は、オシバナ駅で鉄の森と戦っているのですが、戦況は、カイトとエルザが一気に

敵を蹴散らして、時々私とルーシイを襲ってくる人達は、ルーシイが星霊魔法でキャンサー

をだして、敵の髪を切り、戦意を喪失させて、私が津波を起こし、敵を吹き飛ばしているのです。

それにしても、カイトが怒るところなんて久し振りなのです。顔が怖くて見れないのです…

さて、なんで私達がこんな状況かというと、ララバイの危険性を知った私達は、クヌギ駅で

オシバナ駅で問題がでたらしいという情報を聞いた私達は、急いでここにたどり着いたのです。

しかし、この時のエルザの運転は危険だったのです。

カイトはジェットコースターみたいで楽しかったと言っていました。が、私は車に振り

落とされないよう、必死でした。

グレイやルーシイは顔を青ざめ、ナツは気絶していたのです。

駅に着いた私達は、軍隊の人に話を聞こうとしたのですが、エルザが自分の質問に対して

すぐに答えない人に、腹に拳を入れていました。お、恐ろしかったのです…

駅に入ると、軍の人達が倒れていて、鉄の森の魔導使達が待ち構えていたのです！

そして、鉄の森のエース、死神エリゴールがララバイを町に放送すると言ってきたのです！

エリゴールの言葉に動揺していると、鉄の森の一人が攻撃を仕掛けてきました。が、ナツのおがげでなんとか防げたのです。そこで私は、ふと疑問に思ったのです。

ララバイは音を聴いたら死んでしまう。けど、鉄の森の人達は逃げる素振りをみせません。

いったいなぜなのでしょう、とカイトに相談したところ、鉄の森の奴らにそれを言ってみろ、と妙に笑いながら言ってきたのです。

なぜかはわかりませんが、とりあえずカイトの言葉に従って、その疑問を鉄の森の皆さんに言ってみたのです。すると、鉄の森の皆さんは、ギクッ！

というような顔をしたのです。

すると、エルザ達が奴らの目的はここじゃないということに気づいたのです！

私はこの時、初めて皆さんの役に立てられたのですごく嬉しかったのです！

そしてエリゴールは一人だけ何処かに逃げたので、エルザがナツと 그레이 にエリゴールを追うように命令したのです。

二人は不満そうな顔をしましたが、カイトが弾を二人の足下に撃ちまくり、

エリゴールを追うように走り出したのです。

そして私達は、鉄の森の退治ということになったのです。しかし何故、カイトがキレているかというところ…

「じゃあカイト、援護を頼むのです！」

「わかった、とつとと終らせるぞ」

「私も前出るんだ…」

「ルーシイ、頑張るのです！」

私達はいつものフォーメーションで、戦闘をするつもりでした。しかし…

「けっ、敵はヤロウ一人と女三人だぜ。」

「妖精の脱衣ショーでもやるか」

ピキッ

何故でしょう、空気が一瞬のうちに凍ったような感じでした。

「……スイカ、ルーシイ下がっていいぞ…俺がやる。」

「え、なんで…」

「いいから下がってろ！」

「は、はい！分かりました！！」

ルーシイかなり怖がっていたのですね

私も人のことを言えませんが、カイトの顔を見るのが怖いです。

「なんだ？ヤロウ一人でやろうってのか？」

「なめてんじゃねーぞ！」

「……スイカの…」

「ん？」

「スイカの裸体を見て良いのは、俺だけだあああああ！！！」

というわけなのです。…カイトはロリコンなのですかね？

私は、スタイルや背も良くないのに私のことを好きだと言います。

本人は性格が好みだと言っていますが、実際はどうなのでしょう？
気になるのです。

こうして、ここにいる鉄の森の人達を倒したのです。

カイトサイド

「ふう、なんとか片づいた。」

「ああ、そうだな。」

「あんなにいっぱいいたのに、二人だけでほとんど倒しちゃうなんて……」

「ま、雑魚だったしな」

しかし、スイカに手をかけようとするとは……まったくげせない奴らだ。

「よし、じゃあここからは別れて行動しよう、スイカとルーシイはナツ達の後を、

俺とエルザはいったん別の道から外に出てみようと思う。」

「うむ、わかった。」

「わかったわ。」

「任せるのです。」

こうして俺達は別行動をとるにだった。

俺はみんなと別れ、外に出ようとすると魔風壁がはられていた

「少し、おそかったかな。」

一様まだ時間はそれほどたっていない。

俺はエリゴールがまだいないかどうか、辺りを調べることにした。

しばらくすると、エリゴールと傷だらけのエルザが

いた。たぶん、無理やり外に出ようとしたのだろう。

「エルザ、大丈夫か!？」

「カイトか……なんとかな。」

「ハハハ!この魔風壁からは抜け出すことは不可能だ!では、ハエ共、

失礼するぜ。」

エリゴールはそういうと、どこかへ行ってしまった。

「待て！…くそ、奴の目的はいつたい…」

そろそろ、言った方が良いかな。

「エルザ、この次の駅ってなんだったつけ？」

「？確か、クローバー駅のはずだが…」

「マズイな…そこには、マスター達が集まってる。」

「定例会か！？では、奴の目的は…」

「たぶんララバイを、ギルドマスター達に聴かせるつもり、なんだろうな…」

エルザ、お前はナツ達と合流してくれ。俺は、エリゴールを追う。

「

「！？しかし、この魔風壁では…そうか！お前がナツと一緒に移動した能力を使えば…」

「いや、あれはちよつとした実験だな。今度はそれとは違う方法で出ようと思う。」

「…わかった。気を付けるんだぞ。」

「大丈夫だ。お前達が追い付く頃には、エリゴールを倒してるから。」

「

俺がそう言つと、エルザはフツと笑い、駅の中へ入っていった。

さーってと、どうするかな。

ボソソジャンプはイチイチCCを作つて、体のナノマシンを調整しないといけないからな。

さつきはフィールド張つたら他人と移動できるか、調べたかっただけだからな…

なにか他の移動系の魔法ってなんかあったつけ？

うーん

あ、そうだ！魔法じゃなくて、個人の能力使お！

俺は黒いカビのようなものを、手から出し、魔風壁の外をイメージしながら、

黒カビの中に入る。

抜けると、そこは魔風壁の外で、ワープは成功したらしい。
以外と簡単に出来るんだな、ゴームのワープって。

俺は気を取り直し、エリゴールを追いかける準備をする。

コインをかなり高く上げ、クラウチングスタートの構えをとる。

コインが落ちるまで、30メートル…20メートル…10メートル…

チリン！

スタートだ！！

いきなり戦闘！？雑魚に構ってる時間は無い！（後書き）

クロムです。

久々の更新でした。

原作キャラの出番が少ない…

では、説明です。

ニードルバレット
針弾

弾が当たると、弾け、中から針が大量に飛び散る。
運が良ければ、たぶん死なない。

グラビティバレット
重力弾

弾が当たると、弾け、周囲に強力な重力が発生し
敵を押し潰す。カイトが自分に使っている、
グラビレイとは違う。

インバクトバレット
衝撃弾

弾が当たると、弾け、周囲に強力な衝撃が発生し
敵をぶっ飛ばす。周りの壁やしも消し飛ぶ。

ワープ

原作 金色のガッシュ

ゴームの能力。手から、黒いカビのようなものを

放出し、その中に入ること、好きな所に移動することができる。

今回はVSエリゴールで

風VS風のバトルを試みようと思います。
では！

吹き荒らす風！深淵の消滅者VS死神！

エリゴールは思わなかった。

フェアリーテイルは魔風壁で閉じ込め、自分は風の魔法を使い、最高スピードで移動している。

だから、ギルドマスター達を確実に殺せると思った。

なので思わなかったのだ。フェアリーテイルの一人が、自分をまるで待っていたかのように立っていたのだから。

カイトサイド

「ふう、このあたりでいいかな。」

今、俺がいるのは、クローバー駅に向かう線路の上にいる。

エリゴールを先回りするため、「答えを出す者」（アンサー・トーカー）の能力

を使って最短コースを割り出し、超スピードで移動したのだ。

どうやら、エリゴールはまだ来ていない。

「さて、どうすっかな」

エリゴールは風魔法の使い手、となると銃じゃ風で弾丸が防がれるし、素手だとスピードを

だせば勝てるけど面倒だし……だったら…

そう考えていると、エリゴールがこちらに向かって来た。

俺を見たエリゴールは、驚いた顔をして止まり俺と同じように、線路の上に立った。

「てめえ、なんでここにいる！」

「なんでって言われても、ただ魔風壁を抜け出して、おまえを待ち

伏せるために先回りしたから

ここにいるだけだ。お前をこの先には行かせられないからな。」

「魔風壁がこんなにも速く破られるとはおもわなかったが、そういうわけにはいかねえ！」

俺はあの爺共に制裁を与えてやるんだよ！」

エリゴールは持っていた鎌を構え、戦闘体勢にはいる。俺も構えようとしたが、

「エリゴール、少し聞くが俺が誰だか知ってるか？」

「ああ？知ってるぜ、深淵の消滅者だろ？」

まさか正規ギルドに所属していたとは知らなかったがな。それがどうした？」

やっぱり知っているのか。俺ってどんぐらい有名なんだろう？

「そのあだ名がどうやってついたか、知ってるか？」

「ああ、俺が聞いた話ではそいつに狙われた奴は必ず存在を消されちまう。」

例え、強くても逃げ足が速くてもな。だが俺には関係ねえ！

てめえをぶっ倒して、俺の名をもっと広がせてやるぜ！速く銃を構えやがれ！」

…なるほどそういうわけか。

俺が滅竜魔法使ってたのは、大体半年程前だから素手から銃に武器を変えた頃か…

そんだけ前からつけられたのに、今日になるまで知らなかったなんて…まあいいや！

理由が分かってスッキリしたし。じゃあ、やるか！

俺はポケットからドクロがついている指輪を

取り出し指にはめた。

「デイメンションARM、「ジッパー」！！」

ボンッ スズズッ

俺は空中に出した「ジッパ―」の中に手をつ込んでエリゴールと戦うのに必要な武器を探した。

ああ、やっぱり道具の整理しておくべきだった…ごちゃごちゃしすぎて、どれがどれだか分からん！

「おい、てめえ何してやがる、速くしやがれ！」

ああ、もうエリゴール待たせてるよ。

不意打ちされないだけかもしれませんが、速くしないと…えーと、よしこれだ！

俺は「ジッパ―」から手を抜き出し、一本の羽のような形をした大剣を取り出した。

「どうゆうことだ、深淵の消滅者は銃か素手しか使わねえと聞いたが？」

「別に、お前相手だと風で弾丸や素手も当たりそうにないからな。だから、同じ条件でやったほうがやりやすいと思ったただけ。」

レヴェリー「メザランズ…まさか武器として、作れるとは俺も思わなかったがな。」

「どっちの風が強いのか、試してみるか？」

「まさか、貴様も風使いか！？…なるほどおもしれえ、やってやるぜ！！」

俺達は武器を構え、体勢をとる。

「ストームブリンガー！！」

「ノトスコード！！」

互いに風がぶつかりあい、俺の方が強かったのか、エリゴールの風を撃ち破り、エリゴールへと向かう。

「チィ、ストームウォール！！」

エリゴールが魔風壁によって防ぐ。

「一気に決めさせてもらおう！」

「させるか、ストームメール！！」

俺はエリゴールに近づくと、風の鎧によって吹き飛ばされる。

「ぐつ、風の鎧か!？」

「その通りだ。これは俺から外に向かって風が吹いている。だから、
てめえの攻撃は俺には

当たらねえ!そして、決めさせるのは俺のほうだぜ!ストームシュ
レッター!」

エリゴールが再び、風の魔法を使ってくる。

「ガーティネイル!」

俺も魔法を使い、相殺させる。今は防いでいるけど、これじゃどれ
だけでもつか…

「なかなかやるじゃねーか、消滅者さんよ!だが、これで吹き飛び
やがれ!」

キメラ・バルム!」

強力な風が俺に向かって来る。

やばい、あれを防ぐには時間が…ん?そうだ!

「なめるな!リジェクトアウト!」

風が俺を包み込み、エリゴールの風を全て受け流す。

「バカな、俺の最大魔法が外れただ!」

「これは、お前のストームメールと似てな、全ての攻撃を受け流す
風の鎧だ!

そして、見つけたぜ。お前のストームメールの弱点をな!」

「何っ!？」

「ストームメールは常に外に向かって風が吹いている。だがこれが、
予想以上に強い

攻撃が真上から来たら…その答えは自分の体で確かめやがれ!」
俺はエリゴールの上に魔方陣を形成する。

「貴様は、俺以上の風使いだっていうのか!？」

「お前みたいに、マスター達をララバイなんかで殺そうとする奴に
誰が負けるか!

喰らいやがれ!神の息吹き、ゴッドブレス!」

「ちつくしよおおおおお！！！」

緑色の閃光がエリゴールに降り注ぎ、エリゴールは倒れた。

「はぁ、疲れた」

俺はジッパーを使って、メザランスを戻した。

ジッパーは使うこと無いって思ってたけど、これからは常に着けておこつと。

後、整理も。俺は地面に座り、スイカと連絡を取る。

（スイカ、こっちはもう終わったぞ。）

（あつ、カイト無事で良かったのです！今、そっちに向かっているから待ってるのです！）

（了解つと。）

それにしても、エレメンタルジェレイド、読んでおいてよかった！
エリゴールの弱点、クーと同じだからな！

俺は、エリゴールとの戦いで壊した線路を直しながら、スイカ達を待つのだった。

吹き荒らす風！深淵の消滅者VS死神！（後書き）

クロムです。

試験のせいで1ヶ月間、更新できませんでした…

でもまた、これから更新していきます！

では、解説です。

答えを出す者
アンサートーカー

原作 金色のガッシュ

清麿が死から生還した際に手に入れた力。

あらゆる問題、道具の使い方、病気の治療法、

文字やどうすれば相手に攻撃を当てれるか？

などの答えを、瞬時にだすことができる。

レヴェリー＝メザランス

原作 エレメンタルジェレイド

レンが武器となった姿。

強力な風の技を繰り出す。

大剣だがかなり軽い。

本来は腕と合体したような状態だが、

カイトは、腕に装着するような形にしてある。

ノトスコード

原作 エレメンタルジェレイド

レンが出せる、技の一つ。

強力な風の一閃を放つ。

ガーティネイル

原作 テイルズ

風の魔法。

風の爪が相手を切り裂く。

ゴッドブレス

原作 テイルズ

風の上級魔法。

巨大な緑色の閃光が相手に降り注ぐ。

次回はV S ララバイまではいきたいです。

夢の出来事は何かを物語っている！？

―へえ、いい眺めじゃない。よくこんなところ見つけられたわね。

―あれ、ここは…

―5歳の時からこの辺りをよく走ってた時にたまたま見つけたんだ。ひさしぶり来たけど変わってないな、ここ。―

―おいおい、そんな時から走ってたのかよ…―

これは…確か高校の時の…

―その時から海斗の『俊足』伝説が始まったということね。―

―運動バカ伝説とも言えるな。―

―楓香のこと褒め言葉として受け取るが、迅！それはどういうことだ！…―

―だって、事実だろう？―

―違う！―テストの総合点では俺のほうがお前より上だったろうが！…！―

―副教科と国A Bと数？Aと理科だけは満点近くとってたからな、それは認める…だがお前は赤点2つあったということを忘れているぞ？―

―ぐっ…そ、それは…―

―たとえば総合点が良くても、赤点を取ってしまったという事実を変えられ…―

―えい！―

―ぎゃあああ！…―

ああ、あつたなこんな出来事。あの時は迅にキレて、まだ治ってない足を

蹴ったんだっけ…迅、痛かったろうな…

―二人とも、そこまでにしなさい。せつかくの休みの日にテストの話なんてするものじゃないわ。―

―前まではそんな話ばっかしてたくせに…―

―何か言った？―

―いや、別に…―

確かに入学当時の頃の楓香と比べたらずいぶんと変わったと思う。話しやすくなったし、よく笑うようになった。

―それにしても、いい眺めね。―

―まあ、確かにめつたに見られるもんじゃないな。―

二人がここから見える景色を見ながら呟く。

この頃は楽しかったな…けど…

―じゃあ、また三人でここに来るか？―

―いいわね、それ！―

―でも、こういう場所は1ヶ月そこらで来るものじゃないぞ。―

―うゝん…だったら、思い切って1年後はどうだ？―

―それなら俺もいいと思う。―

―私も同感。―

―よし、じゃあ決まりだ！―

この約束、守れなくなっちまったな…

カイトサイド

「カイトー、大丈夫ですかー!?」

声が聞こえてたので体を起こすと、スイカ達が魔導四輪に乗ってやってきていた。

どうやら俺はエリゴールとの戦いの後始末を終えた後、寝てしまったようだ。

近くにはエリゴールが未だに倒れていた。

昔の思い出が夢にでてくるとはな…つらいだけなのに…

とりあえず今は切り替えないと。

「大丈夫というか、待ちくたびれて寝てたし」

「おいおい、お前には真面目って言う言葉はねえのかよ…」

「別いいじゃん、暇だったし」

魔導四輪から降りたグレイは、呆れたかのように俺に話しかけてきた。

スイカはなぜか倒れているエリゴールに近づき、体を調べている。

そして、ルーシィはエルザとナツに肩を貸してやりながらこちらに近づいてきた。

もちろんその後ろにはカゲヤマがいる。

「エルザ、大丈夫？」

「ああ、気にするな。それよりもナツを…」

「うつ…うつ…」

エルザは魔力の消費が激しかったからだろうが、ナツはいつもの乗り物酔いの

せいでぐったりとしていた。

ナツについてはいつものことだから無視していいだろう。

「カイ、見事だ。よくエリゴールを止めてくれた。」

「しかも、エリゴールに比べると傷が全然ないじゃない!？」

エリゴールは俺のゴットブレスをくらってボロボロ、それに比べると確かに俺には

服にすら、傷一つついていない。まあ、エリゴールの攻撃を全て防いでたし。

「珍しいのです、カイトが銃以外の武器を使うなんて」

エリゴールをなぜか調べていたスイカが、立ち上がって俺に話しかけてきた。

「ああ、そいつの風魔法、銃とかじゃ効かないから別の武器使ったんだが、

よくそれがわかったな？」

「だってエリゴールの体には銃痕や殴られたような跡がないのです。だとすれば、

その他の武器を使ったとしか考えられないのです」

なるほど、だからエリゴールを調べていたのか。

「えっ？カイの武器って銃だけじゃないの？」

「いや、おもに使うのは銃なんだが、様々な相手の戦闘スタイルに對抗できるように、

時々武器を変えて戦えるようにしてるんだ。けど、武器を変えるのも時間がかかるから、

そんなことは滅多にしなければ」

「ほお、そうなのか。グレイ、このことは」

「いや、俺も全くだ。たく、カイには驚かされてばっかだな」

「実際のところ、俺も自分のことに驚いてるんだな、これが」

「……おいおい……」

「カイ！！俺と勝負しやがれ！！」

スイカ達が俺に呆れていると、乗り物酔いから復活したナツが俺に向かって言い放った。

ええー、今になってかよ……

「ナツ、やめておけ！カイはエルザよりも強いかもしれねえ、下手をすればお前死ぬぞ！」

「上等だ！！カイを倒せばエルザを超えられるってことだろ！！」
グレイ止めてくれるのは嬉しいが、その言葉は逆効果だ！

ナツは腕に炎を溜め、今でも襲い掛かってくるような体制をとる。

「ナツ、止めないか！無傷とはいえ、カイだって疲れてるんだ。勝負のことは後にしろ。」

今は定例会の会場に行き、事件の報告と笛の処分について……

エルザが話していると、急に魔導四輪が動き出し、落ちていたララバイを拾うと走り出した。

「ララバイはもらった！油断したな、ハエ共！！ハッハッハッハッハッハッハ！！」

いろいろともめていたせいで、突然の出来事に俺たちは呆然としてしまった。

「おいバカナツ！お前のせいで、カゲが逃げちまったろうが！」

「俺のせいだよー！」

「なんなのよあいつ、助けてあげたのに！」

「とりあえず、追うぞー！」

俺達は急いでカゲヤマを追いかけた。

（カイト、なぜカゲヤマをすぐに追わなかったのですか？）

（大丈夫だ。カゲヤマはララバイを使わない）

（えっ！？じゃあ、なぜ笛を）

（それは着いてからのお楽しみだ）

一方、とある病院の一室。

一人の少年がベットで上半身を体を起こし、一人の少女は窓近くの椅子に座っていた。

「ねえ、ちよつと話があるんだけど…」

「…夢の話か？」

「！！じゃあ、あなたも！？」

「ああ、久しぶりにあいつが夢の中に出てきた…」

「私も、しかも見た夢が私達が約束した時の頃だなんて…」

二人は考えるように顔を下に向けると、すぐに顔をあげ、窓のほうを向き、

空を見るように見上げた。

「あいつ、なのかな」

「さあ、どうだろうな…」

この時二人は、いやカイトを含めた三人は思わなかったらう。

カイトの死が周りにどんな影響を及ぼしたのか。

そしてそれは、カイト自身が実感することになることも…それは、

神のみぞ知ることだった。

夢の出来事は何かを物語っている！？（後書き）

クロムです。

誰か僕に時間をください！

小説が進まず、1ヶ月に1話というこの状況…

夏休みでも、部活と宿題の山で潰れそうです。

次回はVSラバイまでいけるようにがんばりたいです！

化物VS滅竜魔導使

カイトサイド

『クソがあああ!!!!』

「あたるか、そんな攻撃!」

俺はララバイの攻撃を避け、超スピードでクリア・フェザーをぶつけていく。

シュバツダダダダダダ

『ぐおおお!!!!』

「まだ終わらないのですよ!水竜・津波!!」

ゴゴゴゴゴザバーン

『があああ!!!!』

スイカが津波を発生させ、ララバイの体勢を崩す。

「今だ、スイカ!」

「はいなのです!」

「クリア・フェザーバースト!!」

「水竜・散針!!」

シュババババババ

『うおおおおお!!!!』

ララバイの身体中に穴が空いていく。

さて、なんでこんな常態なのかっていうとだなあ…

今より少し前、俺達はカゲを探しに集会所のはずれにいくと、カゲとマスターを見つけた。

近づこうとしたら、マスター・ボブとマスター・ゴールドマインに止められた。

いやあ、マスター・ボブに会うのはキツかった…

半年ほど前まで、ブルーペガサスには世話になったからなあ。

色々とやらかしたのだが、その事は別の機会に話そうか。

そしてマスターがカゲを説得し一件落着かと思ったら、やはりララバイが本当の姿を現した。

本当ならば強力してララバイを倒すのだが…

「皆待つてくれるかしら。ここはスイちゃんとカイちゃんに任せてもらえないかしら？」

「いやいやいや、待つてくれマスター・ボブ！なんで俺達が「貴方達がギルドにいたときは大変だったわね。カイちゃんが一夜ちゃんを毎日のようにボコボコにしたり、スイちゃんがドジっちゃって辺りを水浸しにしたり…大変だったわね」

「……………（汗）」

うわー、汗が止まらないや。あの笑顔でさえ、悪魔の微笑みのように思える。

「だから、今までのをチャラにしてあげるからララバイを倒してもらえないかしら？」

「よし、スイカ！！本気でいくぞ！！！」

「はいなのです！！！」

「ちょ、ちよつと二人ともいいの！？」

ルーシイが俺達を止めようとする。

「いいんですルーシイ！これで今までの事をチャラにしてくれるのなら！！」

「ああ、こんなの安いもんだ！！」

「しかし、相手はゼレフの魔法だぞ」

「大丈夫よみんな。この二人、うちのギルドにいたときは凄い腕前のS級魔導使だったから」

「ま、二人の実力からして、そんなもんだね」
「だな」

「なるほど、それなら安心だな」

ハッピー、グレイ、エルザ納得してくれた。

「俺も戦いてえ！！」

「…ナツ、これ終わったらお前と戦ってやってもいいぜ」
「本当か！？」

「ああ、だから俺達に任せてくれ」

さて、これで準備はできたな。後は…

『では、まずその二人の魂からいただこうかあ！！』
ララバイが俺達に腕を降り下ろしてきた。

バシッ

『なっ！？』

俺が軽く片腕で防いだことにララバイが驚く。

「いけ、スイカ！！」

「はいなのです！水竜・突破！！」

スイカが体に水を纏い、ララバイの胴体に攻撃する。

『がは！ぐ、魔導使ごときが！！』

「よそ見していいのか？」

『なっ！？』

俺はクリア・フェザーで空中に飛びララバイの背後に廻った。

「お前の言う魔導使ごときの實力、たつぷりと受けてもらおう!!」

アウトサイド

「凄い…これが二人の實力なんだ…」

「ああ、互いの息も恐ろしいほどあっている」

「アイツらとは死んでも戦いたくねえな」

「うん、出会った瞬間オイラ終わりだよ」

「俺と同じドラゴンスレイヤー…くう、燃えてきたー!!」

ルーシィ、エルザ、グレイ、ハッピーはカイト達の戦いを見て驚いている。

ナツはカイトと戦うことに燃えていた。

「お主、よくあの二人の面倒などみれたな」

「そんなことないわよマカロフちゃん。あの二人、問題は起こすけど、客から意外と人気があるのよ。おかげでしばらくは繁盛させてもらったわ。マカロフちゃん、これから大変ね」

マカロフはカイト達をギルドにいられたことに頭を悩ませるのだった。

カイトサイド

『ナメるなあ!!』

ララバイは口から破壊光線を放つ

「避けるぞ!クリア・フェザー!!」

「はいなのです!水竜・飛翔!!」

俺達は再び空中に飛び避ける。

すると、ララバイが立ち上がり息を吸い始めると辺りの植物が枯れていく。

「周りの植物の精気が吸いとられていつてるのです!」

「ララバイがくるぞ!!」

『貴様らの魂を頂く!! うおおおお!!!!!!』
皆が耳を塞ぎ、息をのむと…

ぷす~~~~~
ぷす~~~~~
ぷす~~~~~

その音に皆がずっこけそうになる。
スイカは危うく転落しそうだった。

『なんじゃー、この音はー!? ワシの自慢の音色は、一体何処にー
!?!』

「カイト…これは…」

「たぶん、俺達の攻撃で穴が空いたから音が変わったんじゃないか
?」

「なんか、哀れなのです」

『ザケンナー!!!!』

ぷす~~~~~
ぷす~~~~~
ぷす~~~~~

ララバイが変な音をだしながら、逆ギレして暴れまわる。
みんなに危害を加えられたら不味いな…

「スイカ、急いで皆のところへ!!」

「はいなのです!」

スイカは急いで皆のところへ向かう。

案の定、ララバイが皆のところへ破壊光線を飛ばしてきた。
「なんかこつちにきたー!?」

「不味い、グレイ!!」

「ああ!! アイスメイ「水竜・防壁!!」
スイカが水の壁を作り、防ぐ。

うわぁ、なにげにグレイの出番奪ったよ…

グレイ御免…

「スイカ、止めだ！！水筒使え！！」

「……了解なのです！」

スイカはポケットから水筒を取りだし、飲み始める。

よし、じゃあ俺はララバイが枯らした植物でも食おうかな。

俺が息を吸うと、周りの枯れた植物が消えていき、カイトに吸い込まれていく。

「なにあれ！？」

「そうか、カイトの属性は元々無、だから精気を失った植物を食べてるんだ」

大体、このくらいでいいか。よし、じゃあいくぞ！！

「「食つたら力が湧いてきた（のです）……！！」」

「おい！それ、俺の台詞だぞ！！」

いや、ドラゴンスレイヤーなんだから別にいいだろナツ。

『なんだ貴様ら、化物か……！！？？』

いや、お前に言われたくないから。

「じゃあいきますよ！！水竜魔法奥義・四方青龍陣……！！」

スイカが拳を地面に叩きつけると、ララバイを中心に魔法陣が発生。そして陣の四方から4体の水の竜が出現する。

『なんだ、これは……ぐおおお……！！！！』

水の竜がララバイに襲いかかり、ララバイが空中へ上げられる。

「カイト、決めてくれなのです！！」

「ああ、冥竜魔法奥義・クリア・セウノウス……！！」

俺は手をクロスさせ、構えをとる。

すると、全身に竜の鱗を纏い、背に大きな翼をもった、巨大な女神が出現する。

「凄く……綺麗……」

「そして……神々しい……」

ルーシィ達はセウノウスの姿に魅了されていた。

確かにセウノウスは味方からしてみれば天使だが、敵からしてみれば悪魔だな。

セウノウスはララバイを翼で抱くようにして襲いかかる。

『く、来るな…来るなあああ！！！！！！』

ララバイがセウノウスに破壊光線を放つがセウノウスの手で防がれる。

そしてララバイは、セウノウスの翼に包まれ…

『このワシが…このワシがあああああ！！！！！！！！！！』

セウノウスとともに光となって消えた。

「見事じゃ、よくやったの！！」

「すごいじゃない二人とも！！ララバイをあつという間に倒しちゃうなんて！！」

「ルーシイ、照れるですよ」

ルーシイはスイカに抱きついた。

スイカも誉められることに恥ずかしがっている。

「よくやったわね。約束通り、今までの件をチャラにしてあげるわ」

「本当なのですか！？嬉しいですよ！！」

スイカはピョンピョンと跳ねる。

でもスイカ…今は喜んでる場合じゃないぞ…

「どうしたんだ、カイ？元氣ねえみたいけど」

「まさか、どこか怪我したのか？」

グレイとエルザが俺の心配をする。

「いや、俺はなんともない…でも…」

俺が後ろを向きみんなもその方向を見てみると…

「……………やりすぎだああああ！！！！！！！！！！」

！！！！！！

ララバイとの戦闘のせいで集会所はもちろん、近くにあった山は消滅し、クレーターのようになっている。

それを見ると、マスターから魂のようなのがでた。

「あ、なんかでた」

「よし、俺が捕まえ「オラッ!!」ぐふ!!」

俺はナツの腹を殴り、気絶させ、ナツを抱える。

「皆、逃げるぞ!!!」

「わかった!」

「了解!」

「あい!」

「ええ!?!いいの!?!」

「ル、ルーシイ!今はとりあえず逃げるのです!!」

「ちょ、ちよつと待ってよ皆!!」

見事な連携で逃げ出す俺達。

ギルドマスター達も呆然としていたが、正気を取り戻し:

「「「「「てめえらあああ!!!逃げるなあああ!!!」」」」」

「

俺達を追いかけたのであった。

化物VS滅竜魔導使（後書き）

サブタイの書き忘れて、一回書き直しました…書き直し大変です…

クリア・フェザー

冥の滅竜魔法。翼を作り空中を移動する。
翼にあたると消滅する。

クリア・フェザーバースト

クリア・フェザーの羽を相手に向けて全て放つ。

クリア・セウノウス

冥の滅竜魔法奥義。巨大な女神を作り出し、攻撃する。
闇の心をもった者だけを消滅させる。

水竜・突破

水を纏って突撃する。

水竜・散針

身体から水でできた針を放つ。

水竜・飛翔

水でできた翼を作る。

水竜・津波

巨大な津波を発生させ、相手に攻撃する。

水竜・防壁

水の壁を作り、攻撃を防ぐ。

四方青龍陣

水の滅竜魔法奥義。相手を中心に魔法陣を作り、4体の水の竜で相手に攻撃する。

次回は番外編を二話ほどいれるつもりです。
それでは。

エピソード 拳と剣と氷竜

これはカイト達がフェアリーテイルに入る約半年前の出来事である…

楓香サイド

「はあ！せい！！せりや！！！」

「があ！？ぐう！グフウ！！？」

私の拳を三連続くらった盗賊がそのまま吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

体がいつもより軽く感じるし、調子も良い。
こんな感覚、初めてだわ。

「殺るっていうのならまだまだ殺るわよおおお！！！」

「くそ、なんだこいつら！？たった三人でここまで…」

「怯むな！！集団でかかれば問題は…」

「何人いようが今の我にとっては関係ない！散れ…千本桜！！」

「くくくくぐおおおおお！！！！」「」「」「」

迅の千本桜が私達を囲む盗賊達を次々と切り刻んでいく。

「親方！！敵の魔法がこちらに来ます、早く逃げてください！！！」

「くそ、なんだあの魔法は！？あんなの見たことねえぞ！？」

「仕方がない、撤退だ！！野郎共、さっさと逃げ……」

「みいー、何処にいくのですか？」

親方と呼ばれる男が仲間に指示し、振り返ったそこには氷禍が待ち構えていた。

あれ？あの娘さっきまで私の後ろ側で戦ってたと思ってたけど、いつの間にあんな場所に移動したのかしら？

「こいつ、いつの間に！？」

「構うな！！さっさと撤退しろ！！！」

「僕達を襲っておいて逃げるなんて許さないのですう。」

そう言いながら氷禍は空中へ飛び、盗賊達に狙いを定める。

「そんな悪い人達には、必殺技をお見舞いするのですう！！」

「くそ、全員散れ！！こいつの攻撃は集団でなければ……」

「逃がさないのですう！黄氷 牢獄！！」

逃げようとしていた盗賊が、氷禍の黄色の氷によって捕獲されていく。

残っているのは親方と呼ばれる男、ただ一人だ。

「バカな…俺様達がこんな、こんなガキ共に」

「さっさと降参してくれない？ 私達は聞きたいことが「嘗めるな小娘！！子分がいなくても、俺一人貴様らをぶっ殺してやる！！！」」

男は急にぶちギレ、私に向かって殴りかかってきた。

もういい加減にしてくれないかしらね。

私達はただ『あいつ』が居そうだっていう、フェアリーテイルの場所を聞きたいだけだっていうのに…

そんなことを考えながら、私は相手の攻撃をヒョイヒョイ、と避けていく。

「ちょこまかと避けんじゃねえ！！」

いや、敵の攻撃を避けない人って普通いないし、いたとしたらその人はM以外の何者でもないわ。

避けるのもだるくなってきたし、さっさと終わらせるとしましょうか。

バシィ！！

「な、俺の拳を片手で！？」

男は自分の攻撃が受け止められるとは思ってもみなかったらしく、慌てて私から離れようとする。

けど、一度捕まえた敵を逃がすほど私は甘くない。

私は男の拳をしっかりと掴み、少しずつ力をいれていく。

「があああ！！は、離せ、離しやがれ！！！」

「さっきまで避けるなっって言っただのは貴女じゃない。」

「わ、悪かった…頼む、離してくれ！もうお前達に何もしねえから！！」

嘘ね、完璧に。

絶対に手を離したら、攻撃してくるに決まってる。

敵の行動に呆れていると、迅と氷禍がなにやらジェスチャーをしていた。

え〜と何々？敵の手を離してぶっ飛ばせ？

うーん…そういえば、『あいつ』から借りた漫画に面白そうな技があったわね。

ちようど良いわ、この男には実験材になってもらおうかしら。

私は手の力を弱め、ゆっくりと手を離し、距離をとる。

「へ、へへへ！まさか本当に離してくれるとは思わなかったぜ！まんまと引っ掛かったな！！さっきのは全部嘘！最初は、グー……」

「へ？」

私は手を合わせ、オーラを左手に集める。

「ま、待つてk「ジャンケン、グー！！！」」

「ぎゃあああああああああ！！！！！！！！」

そうして男は、空の彼方へと消えていった。

私の名前は霧雨楓香。きりさめ ふうか

一番星高校に通う普通の高校生。

その近くにいるのはクラスメイトの東雲 迅。しのめ じん

そして、謎の天使であり、今は氷の滅竜魔導使の、天川 氷禍。あまかわ ひょうか

何故私達がこんな場所にいいのか、それは今から遡ること数時間前、部活が終わりいつものように帰ろうとした私だったが、急に謎の光に包まれ、気がつくと思つ白い空間にいた。

突然の出来事に混乱していると、光がまた発生。

そしてそこに迅、そして氷禍が現れた。

私達は一瞬落ち着き何故私達が此处に跳ばされたのか詳しく聞いたところ、間違つて死んでしまい、転生した私達の親友であり、私の思い人である、いや、思い人だった男、海斗の手助けをしてほしいというものだった。

海斗にまた会える。

私はその思いでいっぱいだった

私と迅は氷禍の頼みを了承し、手助けの詳細を聞いた。

簡単に説明すると、フェアリーテイルの世界に別の世界の人物が介入したらしいので、そいつらを排除してくれということらしい。

こうして私達はフェアリーテイルの世界に跳ばされたんだけど…

「あーあ…せつかくの手懸かりだったのに…」

「仕方がなかったのよ！力の制御って思ったより難しいし…」

「いや、楓香の場合は力の制御じゃなくて、筋力の制御を…」

ブンッ！！ バキッ！！

「ギャアア！！折れた、今の回し蹴りで絶対に足折れたあああ！！！！」

「一本！！なのですう」

跳ばされた場所が分からず、ひたすらと歩く毎日…けど私は諦めない！！

カイトを出会うその日まで！！！！

「ちょ、これで終わりい！？俺の出番少なえし、てか誰かあああ、足治してえええ！！！！」

エピソード 拳と剣と氷竜（後書き）

久しぶりの投稿です。

キャラの個性を考えるのって難しいです。

次回は新オリキャラの設定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4517t/>

フェアリーテイル 転生者は滅竜魔導使？

2011年11月15日08時23分発行